
B&B 第五章

因幡素兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B & a m p ; B 第五章

【Nコード】

N 6 2 4 4 I

【作者名】

因幡素兎

【あらすじ】

フジモトが死んだ。

姉妹は友人の死の原因を追及するべく、連続殺人事件を追うことになる。

B l u e s

ポツリと雨が降り始めた。誰かが泣いている。

わたしはどこ？わたしは何？わたしは誰？

誰も応えない。

小さな存在が閉ざされ、二つの存在が生まれる。

双頭の存在が辛うじてわたしを生かして、小さなわたしはマッチ箱のような狭い場所で時を閉ざした。

何もないの、この世には？誰もいないの、この世には？ここは何処なの、この世なの？

誰も応えない。

そこにきらめく深紅の口紅をそつと手にとって、触れるように唇に塗って、それに話しかけても何も応えない。

誰も何も分かってくれないならば死んでも同じ。

可愛そうね、蛇悪ちゃん。

前編 /

十一月十三日付け。新聞第一社会面

ゴミ捨て殺人鬼、今度の被害者は有名進学校に通う才女

今日未明、東京都。区金城に住んでいる藤本利香さん（13）

が隣町の生駒町のアパートのゴミ捨て置き場で遺体で発見された。遺体には別段多くの外傷などはなく首と背中に刺し傷があったとの情報が入っている。発見された当初はゴミ袋のようなものに入れられてゴミ捨て置き場に置かれていたことから警察では一連のゴミ捨て場死体遺棄事件と深く関係のあるものとして見て捜査していく方

針だ。

被害者の藤本利香さんは十月十一日の夜から行方不明になっており、利香さんの両親は警察に捜索願いを出していたが、よもやの形で帰宅となった。利香さんは学校でも非常に明るく活発な子でクラスのムードメーカーの様な存在だったと利香さんの通う至成学院中学校の友人達は語っている。

/ 1

私、空木黒葉は、どんなことがあっても泣けない。もともと泣くすべなど知らない。物心ついたときには私という一人の人間は泣く子供ではなかった。

それでも、だからこそ辛いことだって有る。

友人が死んだ。殺されたらしい。そんなに長いつきあいではなかったかもしれない。ここ一年で知り合った友人だった。それでも私は……。

その日、彼女の葬儀に参列した。

葬儀場の前に、姉のセイカと友人達と揃って私たちは彼女の棺に花を捧げた。

棺の先にある仏壇の遺影。写真立ての中の彼女は笑っていて、滑稽だった……。

何で笑顔を浮かべていられるのか不満だった。おまえは殺されたんだぞ？そう問いかけてみたかった。

悪い友人ではなかった。むしろ、いつも惚けていて頭が悪くてバカっぽくて、楽しいヤツだった。

花を手向けているとき、隣で嗚咽が聞こえた。姉の声だった。姉と死んだフジモトは同じクラスのクラスメートだった。とはいえ姉は、よく泣く。

昔からそうだった。物心ついたときからこいつは何かとよく泣く。

いつも先に泣かれるから、私は一度も泣けたことがなかった。ドラマ、映画、アニメ、漫画あらゆる面でこいつは泣くことについて私の出鼻をくじいてきた。おかげで私は涙知らず。

今も、当然涙など出てこない。それが不満だ。耐えられない。私だって・・・こんな時ぐらい大声で泣いてみたい。

誰かが、遺影に花を捧げていく人々の横ですすり泣いている。黒い服を着た参列者達がしずしずと列をなして鎮魂歌を踏んでいく。誰も笑わない。なにか心のどこかが麻痺したような気分だった。

もう、彼女はこの世に存在しないのだということを認識していくための儀式が刻む。次々と花が棺に手向けられていき、私達は受け入れなければいけない。

フジモトは死んだ。

フジモトはよく家に遊びに来ては、ぐうたらと寝転がって甘んじていた。宿題を教えて欲しいとよくせがまれて私は怠惰な彼女を睨み付け無碍に断ることが多かった。少し、今になって後ろめたいもつと優しくしてやっとなればよかったかもしれない。もつとフジモトに良くしてやっとなればよかった。今になって後悔するようなことが多すぎる・・・。

棺に入った彼女の貌は生きてた頃よりも綺麗だった。色あせているはずの頬は赤みをほどよく塗られ、栗色の髪は頭の後ろに整えられ、唇は血色が良さそうに色づけされていた。まるで今にもけろっと起きて動き出しそうなその貌。

でも、その瞳は二度と開くことは無かった。死化粧が彼女の存在の終わりを逆説的に意味していた。

葬儀場から棺が運び出されると、私達は火葬場へ向かうその亡骸を見送った。

人間はいつか死ぬんだ。

黒い霊柩車を見送りながらポツリそう思った。葬儀場の前の道で、青子先生は目を赤くしながら言った。

「私が、あの時、フジモトさんを学校に呼んだりしなければ、あんな事頼まなければ……。」

次にセイカが言った。

「いや、それを言ったらわたしがフジモトをもっと早く家に帰してやれば……。」

「そんなのあたしだって同じだ。」

「私も……。」

アサギもイリヤも嗚咽混じりに次々に後悔を述べた。

フジモトが死んだのは一昨日の夜らしい。ちょうど学校でこたごたが起こつてみんながしくしくしていた最中だ。

その時私は家にいた。もしも私が学校にいたとしたら、フジモトは死ななかつたんだろうか？そんな加害妄想が生まれて、そしてすぐに消えた。

数日前まで目の前で笑っていた人間が、もうこの世にいないという事実はいつたいていという風に受け入れればいいのか私は知らない。いつかは死ぬであろう人間が、今そこで死んだ現状を受け入れる方法も知らない。彼女がどうして死ななければいけなかつたのか私には分からない。

それでも少なくとも分かることはあつた。

フジモトは……殺されたんだ。

私の隣で姉はいつになく静かに未だすすり泣いていた。いつもならうるさくてトラブルメーカーで我が儘で自己中で、気に入らない姉だったが、その姉が隣で心を沈ませているのは、もっと気に入らなかつた。

「セイカ……もう帰ろう。」

私は姉の手を引いてそう告げた。姉はなんの抵抗もしなかつた。

然るべき報いというものを、与えてあげなければいけない……。

そう思った。

帰り道もずっと沈黙が流れた。

だからか、なんでもいい。ふざけたくなった。誰でもいい化かしなくなった。心が痛く沈みきっていて、とても耐えられなかった。まるでどこかに大きな風穴が空いたみたいに脱力した嫌な気持ちだった。

わたしこと空木成果は死ぬのも死なれるのも嫌いなだと気付いた。だから余計、嫌な気持ちだった。

気分を変えたい。抜け出したいと思うのは当然だと思う。

家に戻って、しばらくぼうっとしていると不思議と心はどんどん空っぽになっていった。なんか、わたし暗いなあ……。嫌だった。わたしのせいだろうか？妹も暗い。いつになく暗い。暗いのは嫌いだった。

そこだけ灯りのついたダイニングキッチンのテーブルの上に夕食がラップをかけられて置いてあった。マコトはいない。例の友達の家にもしけ込んでいるのだろう。

間の悪いことにちよっかいをかける相手が居ない。しかたがない、妹を少しかまってやるか……。

しけた面してこんな時によく食べれたものだ。コクハはラップをとり皿の上のあじの開きを黙々と口に運び始めていた。わたしはその様子を眺めて機会をうかがった。

そしてコクハが途中でのを潤そうと麦茶の入ったコップに手をかけようとしたその時、そのコップをずらした。

「……………」

コップを取り損ねたコクハは一瞬キョトンとしてから、鋭い眼差しでわたしを睨む。
どうも。

ニタリとほほえみを返してやった。

コクハは位置をずらされたコップに再び手を伸ばす。するとまたわたしはそれを動かした。するとまたコクハは手を伸ばす。目線はわたしを睨んだままだ。もちろん三度目もスルー。そんな繰り返し数回重なって、ついにコクハはキレた。

ドンッと両手でわたしを突き倒す。よろめくわたし、追撃を開始する妹。床に尻餅をついたわたしは両足でその追撃を阻止。馬乗りに乗っかってきた妹と対峙。

しかし・・・あれ？

コクハはわたしに覆い被さったまま唐突に動きを止め、ふっと妙に涼しい目線でわたしを見下ろす。

嫌な目つきだ。

それからコクハは急に白けたようにさっと素速く立ち上がってわたしから離れて再び椅子に座って食事に取りかかった。

わたしはせつかくのやる気をそがれてしまった。そして少し腹が立った。理由は特にない。なんでもないけど激しく頭にきた。

「おまえ、よくそんな食欲でるね。」

嫌味な口調で言ってやった。葬儀場から帰ってきて初めての言葉だった。コクハは応えない。それどころかもはや得意のシカトでモグモグと食事する。わたしはますますムキになって口を開いた。

「我が妹ながらいかなものかな・・・。死んだんだよ・・・。フジモトが。」

フジモトが死んだ・・・。ドクンと胸をつく言葉。

自分で言っただけで心を乱しているのがすぐ分かった。コクハは食事を口に運ぶ手をピタリと止めた。

こんなつもりじゃなかった。暗い雰囲気を払拭したかったただけなのに・・・。

毒々しい空気を生み出してしまった。自分でも信じられないくらい今、わたしは笑っていない。コクハも徐にこっちを向いたが、笑っては居ない。でもそれは怒ってもいない。どちらかというといつ

もの冷めた表情だった。

「馬鹿なことやってないで、おまえも食え。これから少し忙しくなるぞ。」

そう言つて、また食事を黙々と始めた。

双子だからだろうか？わたしはそれだけでもう、コクハの言わんとしていることを悟った。

徐に立ち上がつて、妹の言うとおり椅子に腰をかけた。テーブルの上のアジの開きのラップを外して、口をつけると、何でだろう？どうしてだろう？

また涙が溢れてきてしまった。

死んだ友の姿が脳裏にちらついて離れない。そののほほんとした笑顔が何回も何回も横切つて、横切つて・・・消えてくれない。それどころか思い出されるのはその友人との思い出。

あいつはよくうちに来て夕飯をくつていった。あいつはよくわたしのする妙な思いつきに参加してくれた。あいつは、あいつは、本当に良いヤツだった・・・この町に来て、あの学校に通い始めて最初にできた最高の友達だった・・・

涙が頬を伝つて口の中に侵入してきた。食べ物の味と涙のしょっぱさが少し混ざつて妙に美味しかった。

すすり泣きながらアジの開きを口に運ぶわたしの頭に妹は静かに手を乗せた。

少し、暖かった・・・

馬鹿野郎。そんなことしたら・・・もつと涙腺がゆるんでしまうじゃないか・・・

「今日は少し、早めに寝ような・・・。」

コクハはいつになく優しい声でそう告げた。わたしは嗚咽混じりに小さく頷き返すだけで精一杯だった。

十一月十五日木曜。

学校？何それ？食えんの？

というわけで、その日からわたし達は姉妹揃って学校を欠席した。理由はある、でも誰に話すわけでもなかった。

もちろんわたしもコクハの方も別に何か具体的なことを言い合っていたわけでもなければ、欠席について示し合わせる打ち合わせもしていない。お互い別々に学校へ欠席を伝えた。これから何をするか？それを話し会う必要など無かった。

それでもマコトには学校に行く伝えて二人して制服を着たまま家を出ることにした。いちいちいい訳を言うのも面倒くさかったし、マコトを巻き込む気もなかった。

家を出る際に「二人揃って登校するなんて珍しいな。」と言われた。ニブチンのマコトのくせに生意気なことを言うものだ。私達二人は偶然だろうってぐらいに装って何食わぬ顔で家を出た。

通勤者や通学者が横切っていく歩道。二人揃って歩く朝の空は高くそして青かった。秋晴れの十一月十五日、午前8時、わたし達の捜査は始まった。

わたし達はしばらく黙って道を歩いていた。妙に深刻そうな雰囲気。妹を見ていて少し煩わしく思った。

「で、どこ行く？」

だから最初にわたしが口火を切った。ここまで何の打ち合わせもなく家を出てきたのだ当然の質問である。

コクハは相変わらず眠そうな切っ先のような鋭い目線でわたしを横見に一瞥した。

「あれだ。とりあえず図書館に行こう。」

「図書館？」

わたしは思わず聞き返した。よもや学校を欠席してまで読みたい本でもあるわけではあるまい。

「資料だよ。あそこなら簡単に集まる。」

「ああ・・・」

納得。私は相づちを打って小さく笑った。それにしてもこいつ相変わらずそう言うところが好きだなと思った。

ここに来る前、一時期カナダに定住していたときもコクハはよく学校をサボって近くの図書館に入り浸っていたことがある。図書館は静かで落ち着く、そうよく言っていたのを思い出した。

「そういえば、この町に越してきてからはあまりそう言った場所行かなくなったねえ、おまえ。」

「ああ、家にいても悪くはなかったからな。」

ふと情感のある声でそう応えたコクハは一瞬もの悲しい表情を浮かべた。

そうだった。この町に来てからはいつも家に友達が居た。琴乃葉家はコクハの友人とわたしの友達のたまり場となっていたのだ。イリヤ、アサギ、そしてフジモト。

その中の一人が欠けた。コクハの言葉はそんな意味を暗喩しているように思えた。

「わたしは……。」

だからだろう、知らず口を開いた。

「絶対に犯人を許さない。」

自分でも嫌になるくらいまじめな言葉だ。コクハは小さく微笑んだ。

「だな……。今度ばかりはそれが誰なのかを突き止めて、それを私達の手で裁いてやる必要がある……。私もそう思うよ。」

らしくない優しい微笑みを浮かべる妹がいつになく好ましく思えた。

「考えてみれば、わたし達がここまで意見が一致するのは珍しくないか？」

「かもな。」

言ってみると二人揃って皮肉そうに笑いあってしまった。

秋晴れの歩道はやがて人気を少なくして、わたし達は午前中空っぽの住宅街を後にした。

要はアレだ。連続して起こった殺人を調べるのに一番重要なことは共通点と特異点だと思うわけだよ。

えっとつまりたとえば5つのボールがあるとする。わたし達が最初にボールを5つあると認識するためにはボールそのものの共通する全体像を知らなければいけない。丸いとか転がるとかそう言った事ね。

そしてその共通点を見つければ逆に一つ一つの特異点を探すことができるわけだ。あの模様はサッカーボールだ、あの模様はバスケットボールだとかいった感じだね。

簡単に言えばサッカーという言葉が特異点、ボールという部分が総称とも言える共通点な訳だ。

そして、とゆーことは共通点を探すことと特異点を探すことは似ているわけもあるし、そのまま繋がった関連に存在していると言える。そして解析という一つの探求方法では特異点と共通点は重要な足がかりになるものだ。

して、わたし達はまずこの一連のゴミ箱死体遺棄事件の全容をまとめようと思った。そうすれば共通点を容易に探し出すことができ、自ずと特異点が浮き彫りになっていくからだ。

生駒図書館。生駒町の郊外に位置する高台の町のすぐ下にひっそりと佇むその図書館にわたしとコクハは入った。

図書館の中は鈴の音も聞こえないと言ったぐらい露骨に静まりかえっていた。てゆーかあれだ。別段、平日だからとか午前中だからとかではなく図書館という場所は静謐な場所だ。しかし、そこには鈴の音どころか人の姿さえほとんど見当たらなかった。やはり、平日の午前中はだれもこんな場所には来ないのだろう。

Ｌ字型の図書館、入ってすぐに同じくＬ字型のカウンターがあつて一人の女性が椅子に腰掛けてなにやら書類をまさぐっている。

手前の長い吹き抜けは背の高い本棚がずらんと並べられてもはや向こうの突き当たりは見えない。右手の短い吹き抜けには壁側に本が寄せられていて読書席が完備されていた。

人が居ない居ないと言ったが意外にもよく見渡せばそれらしき存在は確認できた。ただ全員霞のように存在感が薄い気はした。

長椅子長テーブルの貧乏くさい読書席にはサラリーマンなのか二トなのかスーツを着てたり着てなかったりする大人が二三人寝転がったり座ったりして新聞などをぼうつと暇そうに眺めていた。なんか、田舎の古びた漫画喫茶とかに居そうな顔ぶれだ。

手前の長い吹き抜けのたくさんある本棚のすぐ横にも図書館の緑溢れる庭が吹き抜け窓から見渡せるしゃれた空間があり、そこには腰に優しそうな椅子がいくつか完備されている。その椅子に二人ほどの老人が座って何考えてるのか目の前の緑の庭を眺めてボケーっと口を半開きにしていた。もはや耄碌して今からお迎えを出迎えますといった感じた。

「ねね、こいつら朝からなにやってんだろ？」

小声でコクハに訊くと「さあ？」と気のない返事が返ってきた。そういえばコヤツはこのOBだったんだとはたと気がつく次第だった。

「とりあえず新聞から情報を抜き出そうね。」

なんか、しらないけど乗ってきた。と、わたしは袖をまくって息巻いて過去数ヶ月分の新聞が保管されている場所を訊こうとカウンターに詰め寄ると後ろから一撃が落とされた。

「バカか、おまえは・・・、やめれ！」

ベチつと後頭部にチョップを振り下ろされて妹の呆れた視線を振り返った。

「なんだよう・・・。何故殴る？」

「おまえは文明の利器つてものを使おうとか思わない訳か？大馬鹿者だな。」

言ってコクハが親指で自らの後ろを指さした。

「字型の図書館のちょうどカーブしそうな手前の壁際。そこには一台の託児用のベビーベットの進化は目を見張るものがある。古代、揺り籠の発想から端を発し四つ足折りたたみ！はてはメリーゴーランドなどのトッピングも加え、人類の急成長と肩を並べて進化してきたその歴史をおまえは認めようというのだねっ！

妹よっ！」

「って、おまえは強者だなコクハ。」

「・・・？」

「よもやベビーベットの近代兵器と見るとは・・・確かに、最近のベビーベットの進化は目を見張るものがある。古代、揺り籠の発想から端を発し四つ足折りたたみ！はてはメリーゴーランドなどのトッピングも加え、人類の急成長と肩を並べて進化してきたその歴史をおまえは認めようというのだねっ！

妹よっ！」

感動した。だからといって思わずコクハの両肩を掴んだのが間違いだっただけだ。

「いいかげんに・・・」

ガシツと徐に両手を掴まれて

「しろっつ！」

そのまま思いつきりヘッドバッドをお見舞いされました。

閃光が瞬いて、一瞬目の前が暗闇に落とされた。強烈な痛み・・・痛すぎる。デコがひりひりするんですけど、切れてないかな？やばい痛くて涙が出てきた・・・。久しぶりにこの必殺技を食らった気がする。小学校の頃こいつの給食のサラダに青虫を混ぜたとき以来だ・・・。

「なんだよう。ちよつとふざけただけでしょ・・・。」

「再び痛い思いをしたくなかったら二度とふざけたマネはしないことだな。」

「おまえ、それ悪役の台詞だよ・・・どう聞いても。」

まあ、話はさておき、コクハの言うとおりそのベビーベットの隣に本物の文明の利器というものが設備されていた。もちろん琴乃葉家に戻ればそこにも一台あるんだけどね。

生駒図書館に一台だけ備えられているPCを使ってわたし達はインターネット上の情報サイトからゴミ箱死体遺棄事件のデータを集めることにした。まったく、便利な時代になったものだ。とは言ってもわたしが生まれた頃にはすでにそう言う時代ではあったらしいけどね。

コクハが検索をかけて情報を引き出す、そしてそれをわたしが大学ノートに簡単にまとめるという作業を実に5時間ほど繰り返し続けた。事件の全容を調べるのはそれ系のニュースサイトで容易にできたが、それから事細かな情報などを掲示板などを閲覧しながら探索するのにはずいぶんと時間をとられた。

そしてやつとの思いで集まった資料がこれだ。

(簡略)

連続ゴミ箱死体遺棄事件。

今年の春先に一人の女性の遺体が女性の殺されたと見られる現場の公園の公共のゴミ箱の中でゴミ捨て用のビニール袋にくるまれた状態で発見されたことより端を発する。

最初に殺された女性は都内S北沢のマンションで一人暮らしをしていた当時二十四歳、無職。死体の殺害状況は衣服の上から数力所の刺し傷を受け致命傷になったのは首の付け根の頸動脈への深い切り傷だった。殺害時刻はおよそ午前0時〜四時の間と推定されている。

ネット上での調べによると女性は名門音大出の元プロのピアニストだったが、事件の一年ほど前に指を複雑骨折してピアニスト人生を絶たれていたらしい。

二人目の被害者が出たのは一件目から二ヶ月ほど後のことだった。殺されたのはまた打って変わって男性で、無職の二十七歳。死

体の殺害状況は一件目と比べて明らかに増長しており酷いものだった。同じくゴミ捨て用のビニール袋にくるまれた状態で、今度は現場のS師谷にある某マンションのゴミ置き場で発見されたが、死体の傷跡は無残なもので全裸の状態で全身に無数の刺し傷があり、それが人命に影響を及ぼさない体の末端部に集中していた。致命傷となったのは眼球を突き破って脳みそまで突き抜けていた刺し傷で、おそらく被害者は非道な拷問にあつたような絶命のしかたをしたと見られる。予想殺害時刻はやはり午前0時～四時の間と見られている。

男性は地元のバンドグループに参加していて、将来は武道館でライブをするような有名なギタリストになるのが夢だったという。

二件目から一ヶ月後の七月におこつた三件目も男性で二十三歳フリーターの青年。K堂の路地裏にある粗大ゴミの置き場にゴミ袋にくるまれた状態で全裸で放置されていた。殺害状況はこれもやはり無数の刺し傷などの後に致命傷となる一撃が加えられていた。殺害予測時刻はやはり午前0時～四時の間である。

青年は東京郊外に住むサラリーマンで都内の会社に毎日出勤していた。事件当日は会社の飲み会の後深夜0時前に終電の前にと解散してその後の足取りは不明である。

次に四件目は翌月の八月にサラリーマンの中年の男性が都内某区にあるホテル裏手のゴミ置き場でゴミ袋にくるまれて傷だらけ全裸の遺体で発見される。これも予測殺害時刻は午前0時～四時の間と見られている。

五件目は九月の中頃。自営業を営む三十五歳の独身男性が自宅近くのマンションのゴミ置き場で傷だらけでゴミ袋にくるまれて半裸で遺体で発見されている。

六件目はまた翌月の十月。この月には上旬と下旬に一人ずつ計二人の被害者がでている。一人は都内某区に住むプログラマーの三十三歳の独身男性。やはりゴミ捨て置き場で傷だらけで全裸でゴミ袋にくるまれた状態で発見された。殺害予測時刻もやはり午前0時～

四時だと思われる。

もう一人は都内の社員寮に住む派遣社員の二十九歳の独身男性。これもゴミ置き場で傷だらけで半裸でゴミ袋にくるまれて発見された。殺害予測時刻もまた午前0時～四時の間と見られている。

そして今月十一月に入って犯人はさらに加速して、上旬だけでなんと三人の男性が殺されており、そのどれもがやはり傷だらけでゴミ袋にくるまれてゴミ置き場に遺棄されていた。殺害予測時刻もまた午前0時～四時の間である。

計十件の事件があつたがこれにさらに一件がつい先日加わつた。それがフジモトの死である。

「ずいぶんページを使つたけど……。ここから共通点を探し出せばいい訳か。」

徐に大学ノートを図書館のださいテーブルの上に開いたまま投げ置くと、コクハは小さく相づちを打った。

「ああ、そうだ。」

”考えてみそ”と言つた風にわたしに思考を促すように視線を送る妹。なんか試されてるみたいで腹が立つけど、今回だけはよしとしよう。

合計十一件の殺害。

春先に一回。六月に一回。七月に一回。八月に一回。九月に一回。十月に二回。十一月は序盤に三回。最後にフジモトの一回。

「えつと、あれだ。ここに来てずいぶん増えてるね。」

「当たり前のことを言うな。慣れてきてるだけだ、典型的な連続殺人だよ。」

そうじゃなくて他にもつとあるでしょうつと言う風に眉をよじらす妹。なんか生意気だ。だけど今回だけはよしとしよう。

「ん、じゃあ、そうだな。共通して言えるのはかなり無作為なことかな。」

「再び当たり前。仮にも無差別殺人と言われてるんだからな。他

には？」

他とか・・・。

「えーっと、あれだ、男が圧倒的に多い気がするねえ。」

「うん、だな。それで？」

「そ・・・それで・・・。」

こいつなんか分かつてるくせに言わせてるな・・・。なんかむかついてきた。

「うんと、まあ、あれだ。殺害時刻が一致してるし、全部共通してゴミ捨て場に遺棄されてるとか、かなりSな暴行を受けてるとかそれぐらいだろ。」

「まるでアホの想像力だな。」

コクハは冷めた目つきで侮蔑的な返答を返した。

アホとか・・・この野郎、なめてくれる。

「ならおまえの意見とやらを訊かせてもらおうか！」

訊くとコクハは「ああ、そろそろ出番かな？」って具合にコクリと素直に頷いた。やっぱり狸な野郎である。

「私はね。おまえの言ったことも悪いとは思わない。でも少しプロファイリングってものが足りない。」

一言でうまい具合に否定してくれる。コクハは鋭い目つきで大学ノートを眺めた。

「まずこの事件。事件現場の地名を上げて行くと面白いことが分かる。」

「ん・・・なんだ？」

言われてノートの資料に書いてある死体発見現場の地名を怪訝に眺めてみたがよく理解できない。するとコクハはまたお得意のあきれ顔で説明を始めた。

「まず、一件目がS北沢、二件目がS師ヶ谷、三件目がK堂、四件目がUヶ丘、五件目がY田谷、六件目がK堂、七件目がS師ヶ谷、八件目がUヶ丘、九件目がS北沢、十件目がY田谷、十一件目が金城だ。」

これがどういう事が分かるだろう？」

「・・・皆目分からん。」

ええ、分かりませんとも。どういう意味でしょう？ポカンと目を点にして半口開いた妹にもはや開き直って私は応えた。

「なっ・・・おまえここに住んでもう何ヶ月になるんだよ。電車だよ。電車の路線ぐらい覚えてるだろう。」

・・・。

「ああ、〇急線か。」

なるほどなるほど、言われてみれば確かに事件現場の全てが最寄り駅が私鉄の〇急線だわ。でもわたし路線とか興味ないし。

「でも何ヶ月って別に興味がなければ東京に十年以上住んでも覚えてない人は覚えてないと思うぞ。」

「いや、おまえだけだ。」

な、わたしだけとか、この野郎。

「とにかくこの事件が起きた全ての町は実は〇急線の路線で一本に結べる。さしずめ出発がS北なら終点は金城だな。」

「なるほどね。」

金城からS北沢なんてわたしのクラスでも何人が通学路に使ってるわ。

「S北沢から金城までがだいたい距離にして六キロぐらい。この間を犯人は移動して犯行を行っているのは明白。自ずと犯人は意外と近い場所に潜伏していることが分かる。」

「・・・なんか一気に迫ったな。」

「消去法だ。基本だろ。」

みなさん、得意気にもならない妹を持つといちいち感に障ります。

「次に分かることは死亡時刻の共通点。」

言ってコクハはまた大学ノートを最初のページから開いて箇所箇所指を指しながら説明を始めた。

「おまえも言ったとおり、ほぼ全員が深夜0時から四時までの間に殺されている。鑑識でも被害者の行方が消えた時刻などからでも

これは明白な四時間だ。でもこの共通点はほぼ全員であって実は全員ではないんだよ、セイカ。」

「??？」

コクハの言っていることはつまり深夜過ぎ意外に犯行があったということだけど、そんなもんあったらどうか？わたしは自分で書いた資料のページをめくりながら探したが、まったく見当たらん。

「・・・えっと、だれだっけ？」

訊くとコクハは平然と応えた。

「誰も何もおまえ、フジモトだよ。」

「・・・ああ・・・そうか！」

そうだ、よく考えてみればフジモトの事件だけはノートに書いてないんだ。調べても最新過ぎて見えてこないし。でも、そうだよ。フジモトが殺されたのは他の被害者とまったく違う時刻なんだ。

コクハはわたしの驚愕の貌を眺めながらにやりと笑った。

「だねえ。フジモトは夜の七時過ぎから十時頃の間には殺害された可能性が高いと言われてる。フジモトだけが他とまったく違う時間に殺される必要・・・それは少し確信に迫っていると私は思うね。」

「なるほど、なるほど。よく考えてみればフジモトは他にも被害者の中でも数少ない女だし、たった一人の未成年でもあるわけだなあ。」

「ああ、何故犯人は今までとこうも路線を違えた上にさらには犯行時刻をまだ人々が目を覚ましているそんな危険な時刻に変更したのか。フジモトは誰に殺されたのか、私達の一番知りたいことにたどり着いているのは意外にもフジモト自信の存在かもしれないな。」

「ふむ・・・。」

でも、そのフジモトは死んでしまった。殺人鬼の犯行はいつも足跡を残さない。

「私はね、セイカ。」

あらたまった貌でコクハは口を開いた。

「この事件はフジモトと関係のある人間の犯行だと思うんだよ。」

「フジモトと・・・？」

「いったいだろうゆー？確かにフジモトは特異な点が多い。なんかただならぬ犯人との関連性を想像してしまうのも分からないではない。」

「でもそれは少し決めつけすぎじゃないか？だって、最近の殺人鬼は回数も増やしてるし、いつもと何か違った犯行を行ったって別におかしい段階にいないでしょう？」

「ああ、まあそうだな。」

反論するとコクハは意外に従順に頷いた。

「でも、フジモトだけじゃない。特異なのは・・・。」

「ほう・・・なにさ？」

まだ共通点に齟齬のある被害者がいるのか？

「十一件もの事件。そのほとんどが男なのはおまえのさっき言ったとおりだが、しかもほとんどが成人した大人だということが気になる。」

「こういった事件で一番犠牲になりやすいのは弱者である子供そして次に女だ。なのにこの連続殺人は被害者の大多数が大人の男。まずはここからプロファイリングするべきだな。」

「うむ、確かに・・・でも子供がいないのは当然だろ。殺害時刻は共通して夜中なんだからさ。子供が出歩く時間じゃない。」

「うん、だな。そう言う意味では夜中に女が一人で歩いているというのも少ないから被害者に男が多いとも言える。」

「でもね。」

「言ってコクハは再びテーブルの上の大学ノートを手を取った。」

「・・・？」

ページをめくり

「私が思うに犯人は女よりも男の方が殺しやすいから狙ったんじゃないかと思うんだよ。これを見てご覧。」

わたしにノートを開きながら箇所指を停めて差し出した。

「このおまえが書き写したデータの死の状況のほとんどの男性が

丸裸でビニール袋に入れられている。」

「それがどうした？」

「分からないか？犯人は女の確率がある。深夜の浮かれて油断した男を誘惑してホテルに誘い込み・・・殺す。この程度のことは実は少し目立ついい女なら容易いと思う。」

「おお、なるほど。」

でもなんか、やり方が汚すぎるな。

「ラブホとかは身分証明はいらないし、無人だし、そしてもしも監視カメラに撮られるのが嫌ならば、たとえば近くの路地裏でも公園でも、野外でのそういった行為は深夜なら可能だ。」

「・・・情操教育的に言って生々すぎる話だけだな。」

コクハは苦笑いもせずに小首をかしげ

「どうだろ？別にそう言う意味で話してないしな。」

愚直な言葉を返した。

「とにかく女ならば色気で迫って油断しきつたところに重傷を負わせて、いたぶり殺すことは案外容易なことだと私は思う。」

なるほどねえ。色仕掛けの殺人鬼。なんか昔洋画で見たことがある女ヴァンパイアって感じだな。それに忍者のくノ一とか。

「犯人は女かあ・・・ありえるかもな・・・。」

言って図書館の高い天井を見上げながらわたしは吐息を落とした。こんだけ大量の殺しを成功させてるから男だってわたしは踏んでたんだよねあ・・・。

「でもそれだけじゃない。」

追い打ちをかけるようにコクハは口を開いた。

「私が一番最初に引っかけたのは最初の被害者の特異点だ。」

「ふむ。」

崩れた体制を戻してわたしはコクハに向き直る。

「彼女、島田響子は死ぬ間際に確かに現場の公園で誰かと待ち合わせをしていたと思うんだよ。」

「言ってたねえ。ずいぶん前にそんなこと。確かハンドバッグが

二つとも現場の公園のベンチの上で発見されてたから、そこに座って被害者は何かしていたとか……。」

「ああ、深夜の公園でハンドバッグとか置いて座ってるとか、確実に待ち合わせだと思っわけだ。」

「ふむ……。」

「普通公園でそんな時間に合うのは親しい関係にある彼氏だろう。でも彼氏だったり親しい関係にある男が大切なその女を相手に夜の公園なんて得体の知れない場所で一人で待たすかなということになる。」

「だなあ。確かに結局その為に何者かに彼女は殺されてしまったわけだしね。」

言つとコクハはきよとんとわたしの貌を見つめた。それからなんか勝手に納得しだして、数度頷いた。

「ああ、てゆうかね。はつきり言おう、私は犯人は一件目の被害者の島田響子の待ち合わせの相手だと思うわけだ。そしてそれは男ではなく女だと思う。」

なんと……。つまりこいつは殺人鬼のやろうが偶然誰かと待ち合わせしていた島田響子を見つけて殺したんじゃない。待ち合わせで作画的に殺したと言いたいのか……。

「うーん、でもソレけっこうきつい推理じゃないか？その待ち合わせ相手が犯人だってのはいいと思うけど、女って決めつけられないだろう。男かもしれないよ。だって大切な女なら殺さない。殺す女だからそんな場所にわざわざ呼び出したのかもしれない。」

「それだけじゃないよ私が言いたいのは。」

「ふむ……。」

「殺す相手だからもちろんそんな人気のない時間にそんな視界の遮られた木に囲まれた公園なんて場所に呼び出した。でも、なんでそんな陰気な場所に被害者の島田響子自身が足を向けたかだ。」

「うーむ、何故だろう……。アレかな？島田響子はそいつのその殺意に気付いてなかった？けっこう信用してたのかな？」

「ああ、まあそれもあるだろうけど、私が一番に考えたのはシュチュエーションにぴったりの答えだ。」

「・・・シュチュエーション？」

妙な言葉を出す。シュチュエーションとかドラマじゃないんだよ、リアルは。わたしは小首をかしげて聞き返した。

「深夜の暗闇の空間。誰にも邪魔されず事を運べる見るからに背徳めいた場所。」

コクハは淡々とした表情にほのかに笑みを浮かべて何かを促す。

「・・・分からないねえ。いったい何を言いたいのか？」

「犯罪だよ。」

コクハの口から飛び出たのは、そんな突拍子もない発想だった。

「私はその公園で何らかの犯罪が行われようとしていたんだと思うんだよ。犯人と被害者の間にね。」

「犯罪って言う・・・たとえば？」

「ああ、差し当たって脅迫とか絡んだなんらかの取引でも行われてたんじゃないかな。」

「それは被害者の島田響子が・・・てことだよな？」

「おそらく・・・島田響子が犯人に呼び出されたのではなく、彼女の方が犯人を呼び出して何らかの犯行を行おうとしていたから彼女はあの夜の公園に足を向けたんだと思う。」

「それで待ち合わせ場所に行った犯人は響子の犯行に耐えきれず彼女を殺したと？」

「そうなんだよ。私はそう思えてならないんだあのシュチュエーション。」

「ふむ・・・。」

しばし腕を組んで考えてしまう内容だ。なんかそんな風に考える。この殺人鬼の正体が単なる変質者で収まらなくなってしまう。今までは殺人に具体的な理由が無く衝動的な殺しを行っていたとばかり思っていた無差別殺人鬼が突然、普通の仮にも理性的な犯罪者に思われてきてしまうじゃないか・・・。

「死体がさ・・・」

コクハがポツリと呟くように言った。

「最初のあの事件だけ現場とほぼ同じ位置にあるんだよ。殺人現場と死体遺棄の場所が同一なものも一件目の事件だけの特異点なんだからなおさらその時の犯人は理性的であつても不用意に犯行を行つたように思えてならないんだ。」

おお・・・死体遺棄現場が殺人現場と同じとか確かに、

「なるほどー。それはもつと食いついていい疑問点かもねえ。」

「だからさ、」

わたしが良い点ついてるねえつと褒め称えたとそれを寸止めするとうにコクハは言った。

「とりあえずこの後は島田響子の身边を調べていきたいと思う。」

「お、おう。じゃあ、そうと決まったらさっさと行こうか。」

「ああ、行き先はA上音楽大学だ。」

/ 2

私達はその日のうちに例の〇急線の電車に乗ってA上音楽大学の門をくぐった。誰か大人の連れですつてくらいに堂々とした態度で自然にキャンパスを通る。時刻はすでに二時半になっていた。最寄りの駅から徒歩で十分ほどで着いたその音大は妙にカクカクした形の小山のような建物と隣にある三つの校舎で成り立っていた。昼がとうの昔に過ぎて大学の中の道には人気はちらほらまばらに見れるくらいだった。わたしは音大というくらいだからきつと近づくだけでウルセエ音楽が聞こえてくるものだとばかり思っていたが案外校舎の外は静かなようだった。外見からしてでかすぎるのにこんなだけ静かだと本当はもぬけの殻なのではないかと、なんだか拍子抜けする。わたし達の通う至成学院も授業中は外から見るとこんな感じなのだろうか？とそんな疑問を素朴に投げかけるとコクハは冷めた様子で「そうなんじゃないの。」と興味なさげに応えた。

わたし達は大学で最も大きい建物のA館に入り、そこから事務の窓口で卒業生のことについて知りたいと質問したが、事務員の女が頑なでどうやら身分も証明できない者に情報は明かせないと言う。なんとも厳重なシステムであるが、ちょっと自意識過剰すぎないだろうか？と心の底で突っ込みを入れた。それにそんなに生徒の個人情報を庇護する割には簡単に構内に入れてしまうのは問題だろ、おいと突っ込みたくもなった。

まあ、そういうわけでわたしとコクハはとりあえず出鼻から行き詰まっていた。考えても見れば警察でもないわたし達にそれほどの情報網はない。インターネットのサイトで調べられた情報でも島田響子の住所や出身の大学程度のもので、その実家の住所や関係者について知ることはできなかったのだ。ピアニストとしての彼女はそれほど有名ではなく、その詳しいプロフィールを知ることもしやりにできなかった。

あああ、めんどくせえっと思いつながらわたし達はキャンパスの中にある人気のない屋外ラウンジの椅子に腰掛け頂垂れていた。

とゆうーかわたしはさっきからすごいこの大学について大切なことを忘れていく感じがしてならない。なんとしても思い出したいのだけど、どうも思い出せない……。こういうとき思い出そうとすればするほど記憶が霧の中に消えていく法則はいつたい何なんだろう……。と、そんな時だった。誰かがわたし達に声をかけてきたのだ。

のびのある綺麗な声に滑舌の良いしゃべり方のポツチャリとした若い女性だった。学生だろうか？だとしたら楽器を使えばチューバとかユーホ向きだと思った。

「あなた達……。その制服、もしかして至成学院の生徒さん達じゃない？」

わたし達は同時に自分たちの栗色のセーラータイプの制服を再認して、ああ、制服でここまで来たのかと自覚した。そう思うと電車の中でもずっとこの格好だったのだなと今更ながら後悔した。

「はい、そうですが、ソレが何か？」

コクハはわたしほどそんなことに動じるわけでもなくすぐに女性に聞き返した。すると女性はぱっと明るくなってテンションを上げた高い声になった。

「えー、ねえじゃあ、もしかして木村青子っていう先生しってる？」

見かけとは裏腹にキャピキャピした感じで喋られてわたし達は苦い笑いを浮かべた。

どうやらアオコ先生を知っているらしい。話をしていくと彼女とアオコ先生は同学年で彼女は今、この大学の大学院に通いながらオペラの歌手を目指し続けているらしかった。

「トウコさん、学科は？」と訊いたとき「声楽よ」と答えられてその体型を見ると何となく納得できてしまったのは言うまでもない。

それにしても意外に世界は狭いなあ、アオコ先生がまさかこの音大の出身だったとはと言う貌をしていたのはコクハだけである。実はわたしは知っていた。だからずっとこれまでA上音楽大学と聞いていてモヤモヤと思い出されそうな気持ちであったのだ。まあ、自分の力ではないにしろ思い出せてスッキリしている。

トウコという女性はウザイくらい明るい女でわたし達ともすぐに仲良くなった。彼女が言うには自分はアオコちゃんの大がつくほどの親友だそうだ。

「ねえ、この大学の生徒で島田響子ってゆうピアノ科の女の人知ってる？ たぶんあなたと同学年なんだけど。」

ある程度話して打ち解けると、見計らったようにそれまで黙っていたコクハが口火を切った。すると突然ソレまでギヤアギヤアと自分と青子ちゃんの関係についてとか、最近の至成学院の事件とかについて訊いてきていたトウコは真顔になって口を噤んだ。そして間を置いて訝しげに言った。

「知ってるわよ。でもあなた達、響子のことなんて訊いてどうするの？」

そしてはたと気がついたように「それにあなた達今日学校はどうしたのよ？」と付け足した。

「ソレを言ったらお互い様でしょう。」

コクハはすかさず切り返す。そして徐にわたしに「適当に誤魔化せばいい」と耳打ちした。どうやら本当のことを説明する気はないらしい。

「わたしは気晴らしに外の空気を吸おうと思ったのよ」

「つまり、サボリというわけか。」

突っ込むとトウコは「お互い様、うん、良い言葉ね。」と開き直った。

「まあさ、ちょっと分け合って島田響子さんについて知りたいことがあるんだけど、いくつか質問してもいいかな？」

と流れるに訊くと、トウコは少し嫌そうな貌をしたけど「ま、いいわ」。」と答えた。

「でもあたしってあの子あんまり好きじゃないのよね。アオコが付き合ってるからあたしの方も一応付き合ってたはいたけど、正直死んで安心したわ。」

死んで安心……。かなり穏やかじゃない発言だと思うが、どうしてだろう？

「なに？島田響子ってそんなに嫌なヤツだったの？」

「うん、すつごく」

笑顔で答えたトウコを見るところ、こいつは思っていた以上に感情のはつきりしたヤツであるようだ。B型だな・・・と密かに決めた。まあ、かくいう私もB型だから問題ではない。

「どんな性格だったの？」

コクハが徐に質問した。ちなみにこいつは大のA型真人間である。「ま、一言で言って陰険って感じだったわね。」

トウコはくだらない記憶を呼び起こすように上の空を見ながら答えて徐に上着のポケットに手を入れた。ポケットからはビニールに入ったお菓子が取り出された。それはカントリーマームという甘っ

たるい高カロリーのお菓子だった。こいつはいつもこんなものを常備しているのかと思いながらわたしは彼女のフカフカと気持ちの良さそうなお腹を眺めて一人で納得した。

「ふうん、あれですか？響子さんか死ぬ間際にあの人の周囲でなんか変わったこととかありました？」

コクハがすかさず訊くと、トウコは少し眉間にしわを寄せて不機嫌そうな貌を浮かべた。

「変わったことって言うたら超具体的なことを言えるわよ、あたし。」

具体的・・・それは願ってもない言葉だった。

「あいつあの頃すつごく金回りだけは良くてねえ。」

語り出したトウコは心なしに顔色が怒りに満ちあふれ始めていた。「てゆーのもね。あたし知ってるのよあいつがアオコからお金をゆすつてたのを。」

「金を・・・アオコちゃんから？」

聞き返すとトウコは頷いて今思い出しても腹がったつといって話を続けた。

「アオコはあたしに絶対に相談しなかったし、あたしの方から訊いてもなんだかんだ言っただけをそらされちゃったけど、あたしには分かるのよ。」

「ソレ、どんな理由で揺すつてたのか分かります？」

コクハが身を乗り出して訊いた。するとトウコは首をよこに振ってため息を吐いた。

「それが分からなかったのよねえ。それさえ分かればあたしが全部ぶちこわしにしていたのに。」

「ふむ・・・アオコちゃんがねえ。」

わたしは考えるようなそぶりをしながらコクハを横目に伺った。こいつはもしかしてアオコちゃんを疑っているんだろ？とおもったのだ。コクハが犯人だと思っているのは島田響子に何らかの取引を迫られている待ち合わせの人間。ってことはアオコちゃんが揺

すられていたっていう状況はまさにそれに当てはまるからだ。

「あつ、でもあたし一つ思い当たることならあるわ。」

唐突に思い出したようにトウコは手を叩いて声を上げた。振動で彼女の柔らかそうな豊かなお腹は微動した。わたしは少し感触を確かめてみたいという衝動に駆られたが我慢した。

「それ、何ですか？」と訊いたコクハにトウコは小さく頷いて答えた。

「うん、あのね。その響子って知つての通りピアニストをやってたんだけどね。それもちよつと前にある事件をきっかけに廃業したのよ。」

「ああ」

そこでコクハが何か思い当たったように声を上げた。

「あれですね。指をけがしてピアニストの生命を絶たれたって言うヤツですね。」

トウコは「あら知つてたの？」とふいをつかれたように言った。

「ええ、少し調べましたから。でも詳しいことは知りません。教えていただけますか？」

コクハに促されるとトウコは「いいわよ」と頷いて話し始めた。

「実は響子の怪我って言うのがアオコのせいでもあったのよ。ちょうど二年ぐらい前かな。響子の連弾の練習でアオコが手伝ったところがあるんだけど。その時、アオコが誤って鍵盤のふたを倒しちゃったのよ。それで響子は指を鍵盤の蓋に挟まれて複雑骨折しちゃったの。」

でもね。あたしは全部の責任がアオコにあるとは思わなかったわ。鍵盤の蓋をちゃんとロックしておかなかったのは響子のせいだもの。だからあたし友達の命よりも大切な指を使えなくしてしまって落ち込んでたアオコにそう言つて励ましたんだけど。あの子ってあれでしょ？思いやりが強い子だから、責任感じちゃってね。その頃からもうアオコは響子の奴隷みたいな感じになってたわよ。響子のヤツ指を使えなくしてその苛立ちを全部アオコのせいにしてアオコのこ

とをすつごくき使ったのよ。アオコが大人しい子で責任を感じて
るのを良いことに慰謝料をふんだくただけじゃなく何かって言う
と呼び出したりおごらしたりやりたい放題だったんだから。」

陰険でしつこい嫌なヤツよつと吐き捨ててから、トウコは少し声
を小さくした。

「でも、響子の気持ちも分からないではなかったのよねえ。指を
しかも四本もダメにするなんてピアニストにとって致命的すぎるも
の……。あたしだって今、のどがダメになったら落ち込むなんて
レベルじゃ済まされないわ。だから最初はあたしだって本当に同情
してたのよ。」

「でも、それが揺すりにまで発展したとは考えにくいですね。」

コクハはサラリとまとめて参考にならないと遠回しに言った。ト
ウコはそんなコクハを困ったように一瞥して頷いた。

「そうねえ、でもいつからか異常なほど響子のアオコに対する態
度は変わっていったのよね。まるで弱みでも握られてるんじゃない
かって思わせるくらいだったわ。」

トウコは怪訝そうに告げた。

わたしは話の節々を訊いていて響子ってヤツがむかつくが可愛そ
うなヤツだとは認識した。そしてそれ以上にアオコちゃんという人
間を再認した。

だからコクハを横見に見て、耳打ちした。

「おい、おまえアオコちゃんを疑ってたのか？」

「いや、まだ確信は持てないし、何よりもこの事件は連続殺人鬼
の捜査だからな……。」

と耳打ちで返答してきた。どうやら理論屋のコクハだって分かっ
ているらしい。アオコちゃんという女性がまさかそんな変質的な人
間ではないと言うことを……。

「じゃあ、ま、色々訊けて助かりました。」

適当に挨拶するとわたし達はトウコに礼を言っただけで大学を出た。去
り際にトウコに「いったいあなた達はなんで響子のことなんか調べ

てるの？」と訊かれたが「まあ、成り行きです」といい加減な返答ではぐらかした。

トウコから話を訊いてわたしとコクハは大学を出ると、次の方針を固めた。

それはとりあえずアオコ先生という人間を調べるといふ。わたしとしては少し納得のいかない内容だった。でもコクハは何か引つかかっているらしい。

それもやはり最初の殺人。それだけが他の無差別な殺人より作画的で意味を持っているように感じると言うことだった。それに関しではわたしだって確かにそう思う。だからコクハはアオコちゃんを疑うなんて反対であるわたしの怪訝そうな顔に「誰もアオコ先生が犯人なんて言っていないだろう」とうまいこと言って方向性を定めた。ま、とにかくこうして捜査一日目は終了。この日の収穫はここまですてわたし達は家に戻った。

十一月十六日、わたし達は次にアオコ先生の卒業した高等学校へ向かうことにしていた。

その前にここまでをまとめると。

ようするに妹のコクハは犯人を女と特定し、さらに島田響子とその女との間には、なんらかの不法性を帯びたトラブルがあったと見た。それもおそらく一件目の殺害は犯人の方が被害者の島田響子に呼び出されての待ち合わせでの事件と見た。そして、一件目の事件の特異性から他の事件とは違う人間がやったのかもしれないとさえ思っていた。

コクハが言うにはアオコ先生はかなり事件との関連性が高そうな位置にいるという。というのもアオコ先生が住んでいるのは最初の事件が起きた下北沢のマンションであり事件が多発する路線の線上有る意味終点ともいえる金城まで毎日通勤しているからだ。その

うえに最初と最後の被害者はどちらもアオコ先生の知り合いで、その最初と最後の被害者だけ他の被害者とは違った部分が多々あるからだという。これだけ疑わしい点があつてはさすがにわたしも反論のしようがなかったが、よく考えてみればアオコちゃんを調べればその無罪が自ずと確定していくのだから、そう思えばアオコちゃんを調べることもまんざら間違つてもいらないと思つた。

その日、琴乃葉家を出るときもわたし達はマコトを謀るためだけに制服を着て平日の町へ出た。

またずいぶん晴れ間が続くなあつと青く澄みきつた秋の高い空を見上げながらわたし達は〇急線のホームで佇んでいた。今度の行き先はこの電車に四十分ほど身を揺られて次に国鉄に乗り換えてまた一時間ほどするとつく他県の女子校だ。アオコ先生が卒業したという女子校だがその制服はけっこう有名で某有名人形メーカーの人形のコシユチュームにも採用されたものだそうだ。まあ、できれば試着もしてみたいと思わなきゃ嘘である。

家を出たのが8時頃で早かつたため急行は予想以上に簡単につかまつた。急行がつかまらないようなら準急でいいやと思つていただけと今日は意外についているかもしれない。

でも急行は混んでるから嫌でもある。暑苦しいサラリーマンと押しくらまんじゅうするのは勘弁願いたい気がするのだ。とは言つたものの乗つて驚き拍子抜けだった。

急行電車の中はまばらに立っている人もいたが総じて車両全体が見渡せるぐらいに空いていたのだ。想像ではもつとこうギュウギュウ詰めの新しいタイプのサウナのようなものを考えていたのだが・・。

「ねね、意外に空いてるねえ？」

言つとコクハはつり革に一生懸命手を伸ばしながら冷めた目つきで答えた。

「まあな、急行もわたし達が乗るのは下り、朝の〇急線の下り電車は比較的登りよりは空いてるんだよ。」

ああ、そういうことか。まあ、私達が行くのは都内の方じゃないし当たり前っちゃ当たり前だな。訊いて納得わたしは閉められたドアに背中を預けた。

電車が動き出して三つ目の駅で止まった頃、ドアが開いて数人の男女が入ってきた。

灰色のスーツの中年男。白いカーディガンの鼻持ちならない女。セピアっぽい老人と老婆の夫婦。そして最後にビックサイズの女子が一人のそりと車両に入ってきた。巨体で車両が傾くんでは無いかと思うその女。びっくり目を丸くしてわたし達は眺めた。

「あらあ？二人とも今日も学校はお休みなのお？」

トウコだった・・・。

ドストスと自重を音に変換しながら小走りに近づいてきた彼女にわたし達は一瞬対応を遅れた。

「えつと・・・トウコつてここら辺に住んでたんだ？」

「うん、あたしんちこの近くの」

相変わらずテンションの高い歌うようなしゃべり方でさらっと答えた。なんか、まだ出会って二日目だけどこいつは年中脳天気だなあつと呆れた。

「わたし達は今日はちよつと日帰りで土地巡りしてんだ。」

めんどろうだから先に適当なことをこつちから告げた。するとトウコは「うっそお、最近の子供は自分らだけで日帰り旅なんかするのぉ？なんか生意気ねえ」と怪訝そうに腕を組んだ。

「トウコはこれから院だろ？」

聞き返しながらわたしは横目にコクハを伺った。コクハはどうやらトウコには興味なさげに車窓の外を冷ややかに眺めている。何を考えているやら、少なくとも一度情報を聞き出した人間と喋るような無駄な労力に興味はないといった感じだ。相変わらず無愛想なヤツである。

「うーん、院だけどお・・・。やっぱり予定変えちゃおっかな

可愛くもないのにブリツ子みたくあごに拳を添えて腕を組んでそう言うトウコ。予定を変える？ いったいそれは何のことやらただならぬ気配を感じる。

「ほら、あんた達子供だけで遠くまで行くと危ないじゃない。」
怪訝そうなたわし表情を見てトウコは弁明するように言った。

「つまりおまえは院に行かずになたし達についてくると・・・？」
おそろおそろ聞き返すとパツツンパツツンのお腹を首と一緒に頷かせながらトウコは二カリと豪快に笑みを浮かべた。

あああ、あれだ・・・。自由人だな・・・B型は・・・。はたとその性質の本質に触れてしまった空木成果十三歳の秋である。

「まあ、おまえが大学院をサボる口実にわたし達を使うのはいっこうにかまわんが、こっちに決定権があるのは姉のわたしではなく隣の無愛想な妹なのだよ。」

言ってわたしはおそらく一部始終を全然違う方を向きながらも風の音程度に訊いていた妹に話を振った。コクハは徐に振り向く。トウコは「ダメ？」と無邪気な子供を装うような気持ちの悪い態度で哀願した。

でもどうせ無理だ。堅物のコクハがこんなところで偶然会ったトウコに同行を許可するはずもない。ばつさりと一言で拒否されてしまふのが落ちだろう。

「いいよ。」

しかし、・・・と思ひも寄らない答えが妹の口から発せられたとき、わたしはハニヤッと開いた口をふさげずにいた。

あれか・・・？ 気でも違ったか。なんだってここまであらゆる人に隠して行動してきたのにここに来て突然偶然会った相手の同行を許すのか不明だ・・・。

「ただし、」とここでコクハは一つ条件をトウコに差し出した。
「私達のすることにむやみに口を出さない。それと邪魔しない。
旅中は私の言うことを聞くこと。これが守れなきゃダメ。」

「なあにいい？ 楽しい旅じゃない。なんでそんな意味深なルールが

あるのよう？」

聞き返すトウコにコクハは「疑念が浮かぶようなら諦めてくれていいよ」の一言を返して再び車窓の外に視線を戻してしまった。

私は思う。こういうところこいつは母親に似てきたと……。なんだか考えてることがいまいち広すぎてやってることが理解できないわ、はつきり言つて。

「ま、いいや。トウコがいたら楽しいし。一緒に行こうよ。」

と最終的になんと言つても結局私の思考回路はこころへんで落ち着くのである。

こうしてわたし達は総勢三人の大軍団になつて次の駅で国鉄に乗り換えて東京都を出た。

東京を出る少し前の路線のあたりから景色は一気に過疎つていつて台風が来たら吹っ飛びそうな屋根のついた駅などがみれた。そんなものさえなくホームがぼつんとあるようなところまで行くと車窓の外の風景は辛うじて電線があるのをみて現代であることを認識させるぐらい山や木や田んぼが目立つようになっていった。アオコ先生の通っていた高校とは情報によると小山の上に建てられたような学校であるらしい。想像では洋画のハリーポッターの魔法学校みたいな感じだったが、到着してみると普通の町が広がっていた。コンクリートもスーパードもコンビニもあるごく普通の場所だ。確かに高いビルなんかはそんなに見当たらないが背の高いマンションなら無いこともなかった。これなら電車で通ってきた道の方がよっぽどホグワーツである。まあ、確かに駅からおりて傾斜を登っていかなければその学校にはたどり着けないので小山の上にあるという情報はガセではないのであしからず。

トウコがメタボな体でヒィヒィと息を弾ませながら「二人ともちよつと早いわようつ。」つと後ろから叫ぶ。坂道を登つているときは本気でこいつを連れてきたのは間違いだったと思つた。

「おい、トウコ少しは痩せろ。」

「やあね。あたしだって好きでこんな体してるんじゃないわよ。」

坂道の途中の公園でハゲハゲと途中のパン屋で買った黒糖の甘つたるいコッペパンをむさぼりながらトウコは秋なのに汗だくで貌を真っ赤にしながら疲れ切った様子で言った。まったくしょうがないヤツである。

トウコのせいで一休みしてからわたし達がアオコちゃんの通っていたS女子校に到着したのはちょうど給食時の昼休みの時間帯だった。

だいぶ遅れをとってしまった。朝の八時に家を出たのにここまで来るのに四時間近くかかった計算になる。

女子校に着くとわたし達はトウコを保護者として学校見学という名目で校舎に入った。

コクハが言うには大人が一人いた方が確かに動きやすいという考えがあつてトウコを連れてくることを許可したようだが、その狙いはあながち間違ひではなかった。

高校側は中学生二人を連れて学校見学に来たトウコを歓迎してくれた。なかなかフレンドリーな学校ではないか。制服もセーラータイプのおしゃれなもので悪くはないと私は思った。

「でもちよつと家から遠すぎるな。」

コクハにそう耳打ちすると「おまえはいつもどうでもいいことを考えてるな」と冷たい視線で返された。

トウコはデブった体型のためか年齢よりも年上に見えないこともない。高校の新入生勧誘の役目でももっているのだろうか男性職員はわたし達を案内している最中、終始トウコのことをわたし達の母親だと勘違いしていた。しかし、トウコもわたし達もその誤解を弁解する気はもちろんなかった。

トウコを母親・・・しかし、そんなのいくらなんでも笑ってしまう。キャラはトウコみたいにデブじゃないしそれにもっとずっと美人だ。あ、どうでもいいけどキャラっていうのはわたしとコクハの実の母親の名前ね。

わたし達は教室の紹介を受けますか？という男性職員の勧めに「

トウコ、おまえだけ行つてきて」とその役目を押しつけてわたしとコクハは職員室の前で待つてると言い張った。

男性職員は元々子供達のほうに教室とか校風を紹介したいのに何故実際通うわけでもない母親にだけそんなことをしなければいけないのか訳分からんつという感じで小首をかしげながらも「いいから、いいから」というトウコの押しの強さに負けて二人して去つていった。

トウコは去り際に振り返つてわたし達にウィンクをしたがなんか本人はそれなりに気を利かせたつもりらしい。あいつは何かに感じてゐるんだろうか？

さあ、これからが大仕事である。わたし達は職員室のドアを開き二人して中をのぞき込む。小さい隙間から顔を縦に二つ並べてのぞき込む姿は一段足りないだるま突きのだるまのようであつただろう。中は廊下のあちらこちらの騒がしい生徒達の奇声よりはずつと音量の低い落ち着いた雰囲気だつたがそれでも昼休み。教員達は穏やかだけどそれなりに碎けた雰囲気で笑いながらおしゃべりをする人達もいた。もちろん休み時間でも黙々とノートパソコンに向かつてキーボードを打つものも多々見受けられる。わたしは至成学院の職員室と比べてわりと暖かな印象を受けた。至成学院の職員室は昼休みだろうと授業中だろうとバリバリとした大人達の絶え間ない働きが持続され、まるでそこら中に仕事中です来客者は事務の窓口へという看板がつり下げられているような感じだつたのを思い出してここが新鮮に感じた。

ドアの隙間から眼球だけをキョロキョロと左右に動かし中の様子をしばらくうかがっているとなたしの頭の下に居るコクハの頭が「おいっ」と人目をはばかる小さな声で文句を言つた。

「なんだよ？」

答えると冷たい視線でコクハは睨み見上げた。

「背中に手を置くな。重いんだよ。」

はっとして気がつくとなたしは前のめりの体制を保つために下に

居るコクハの背に手を乗せて体を支えていた。

「ああ、悪い。」

すつと背から手を引くとその時、誰かがわたしの肩をノックした。
「君たち、見学者の子達？こんなところで何やってるの？」

振り返るとつり目の美人が一人立っていた。胸の前で出席簿を抱えてきょとんと不審な格好をしているわたし達を見下ろす。少し間の抜けた馬鹿正直そうな雰囲気のアオコちゃんに似てると思った。

「ああ、ちょうどいいです。ちょっと聞きたいことがあるんですけど？」

コクハが即座に立ち上がって膝をはたいて、すかさず言った。

「私でいいの？」

聞き返す女教師に返事もしないでコクハは「木村青子っていう生徒が昔この学校に通ってたんですが、知ってます？」と訪ねる。女教師は驚き目をぱちぱちさせながら「あら、あなた達、青子さんのお知り合い？」と少し嬉しそうに破顔して答えた。

わたし達は女教師に招かれて職員室の隣の方を曲がるとある大きな図書室に向かった。女教師の名前は市ノ瀬知美といい、見た目よりも十歳ぐらい上のベテランの教師だった。

図書室は広く二つの区画に分かれた形をしていた。入ってすぐに椅子や机が並べられた縦長の広い部屋があり壁や椅子や机の奥の方にたくさんの本棚が並んでいた。静かな図書室だったが見渡したただけでも生徒達は十人近く好きな本を取ってそこらの椅子で読書にふけているのが覗えた。

市ノ瀬先生に勧められてわたし達は彼女の向かいの椅子に腰を下ろした。図書室には校庭側の壁に窓があつて、そこから校庭の様子が一望できた。窓から見える手前の風景には昼休みでもジャージを着てサッカーをする女子高生の姿が見れた。わたしは女子校では女でもサッカーをするんだなと意外性におもしろみを感じた。

「私は青子さんの高校二年と三年の頃に担任を受け持ってたの。」

終始自分を真つ直ぐ見つめるコクハに向かい合つて市ノ瀬は柔らかな笑みを浮かべながら口火を切った。

そういえばここがアオコちゃんの母校なのだと言ながら思い起こすわたしは、ふとアオコちゃんは高校の頃どんな生徒だったのだろうかと思つた。

周囲にまばらにいる読書に熱心ないかにもめがねをかけて前髪を下ろしたような大人しそうな才女だったのか？それとも今とは打つて変わつて男つ気のあるちようど外でサッカーボールを蹴っているような女だったのか？

そんなことを考えていると突如賑やかな団体の声が図書室のドアをくぐつたのが聞こえてきた。

サバサバ、キャピキャピ、ゲラゲラと人目をはばからない堂々とした様子と短いスカートとはだけた胸元のチャラチャラした女子達だった。入ってくると同時に彼女たちは市ノ瀬先生に目をとめてから、すぐにわたし達の存在に気付いてさらに甲高い悲鳴のような声を上げた。

「キヤー、何なにこの子達？先生の子供？」

市ノ瀬が苦笑いで「あなた達、図書室では静かにしなさい。」と諭すとまるでシカトで女子高生達は「ちよつと可愛くない。超可愛いんだけどっ」と無意味に驚いたり笑ったりする。コクハは露骨に嫌そうな貌をして不機嫌に視線をそらした。

わたしはこれがギャルというヤツだなとカルチャー的に観察の対象として適当に受け答えした。

「え？マジどこから来たの？」

「都内から来ました。お姉さん達は地元の人？」

「ねえ、そんなことよりさ、マジでトモちゃんの子供なの？」

「いや、違います。今日は学校見学で・・・。」

「ねえマジ、そのボンボン可愛くない？」

まあ、良くわかんないけどこの人達は基本的に人の話は聞かない生物であることは了承した。そして同時に空気も読まないことも確

認した。おそらく世界戦争になっても彼女たちだけは滅びないのではないだろうかと思える力強さのようなものも感じた。

私がだいたいの生態を認知した頃に女子高生達はやっと用事を思い出したらしく一人がカウンターで本を返却すると全員揃ってさつさと去っていった。嵐のごとくとはこのことである。後に残された図書室を徐に見渡すと数人が不機嫌そうな貌で彼女たちの消えていったドアの向こうを睨んでいた。

なんというか・・・アレが噂のモンスターというヤツだなと一人納得する次第だった。

「ごめんねえ。根は悪い子達じゃないのよ。」

市ノ瀬が気遣うように弁明するとコクハは「そういうのをたちが悪いと言っんですね。」と厳しく切り返した。市ノ瀬はぐうの音も出ないで口を噤んだ。

「ま、そんなことよりさ。」

わたしはぶちこわされた空気を回復するべく話を再開させた。

「アオコちゃんってどんな生徒だったの？」

訪ねると市ノ瀬は笑顔に戻ってすっと思いい出を呼び起こすような表情で虚空を眺めた。

「そうねえ。すっごく心の優しい子だったわあ。」

アオコちゃんのことを語っているときの市ノ瀬は何となく嬉しそっうだった。わたしはアオコちゃんはどこにいても人に好かれる体質なのだなあと再認した。

「あの子、吹奏楽部に入ってたね。その頃も、もちろん今もだけど私は吹奏楽部の顧問だったから、よくいろんなお話をしたわ。」

特に青子さんは友達の悩み相談を代わりに私に相談したりしてね。よく二人でここでこうして向かい合って色々お喋りしたの。

私もピアノを習ってたから趣味も同じだったし、あの子とはすっごく近いものを感じたから一緒に話していて楽しかったわ。教師がこんなことを言うのもなんだけど、良いお友達って感じだったのよ。」

「何か特に変わったこととかありませんでしたか？」

話を訊いていて煮え切らない様子でコクハが口を挟んだ。

「変わったこと？」

きょとんと聞き返す市ノ瀬は「そういえば……。」と何か思い出したように語り始めた。

「あの子、吹奏楽部に入っても図書委員もやってたし、学級委員も受け持ったりとすごく働く子だったけど、文化祭の実行委員だけは猛烈に拒絶したのを覚えてるわ。」

なんか、お家の門限がすごく厳しいらしくて六時前には必ず家に帰らなきゃいけないって言ってたわね。学級委員とかそのほかの仕事は放課後残としてもそこまで長居はしなくても良かったし吹奏楽部の練習も早めに切り上げても十分に譜面はお復習いしてきたから問題はなかったけど、文化祭の実行委員だけは別でしょ。ほら、あれって一時期猛烈に忙しくなるものだからどうしても夜遅くまで学校に残る羽目になるじゃない。それが嫌だったみたいなの。正直、普通の生徒だったら推薦を辞退することは別段目立ったことじゃなかったけど、青子さんが人から頼まれて拒否するのを見たのはあれが最初で最後だったのよねえ。」

「その話なら……。」

わたしはふとそういつた覚えが自分にもあるのを思い出した。それは以前B組のクラスで文化祭にお化け屋敷をやるうという案が出たときのことだった。その時、アオコちゃんはけっこう猛烈に反対したのだ。しかもその理由がお化け屋敷とかは準備にすごい労力が居るからよくないと言うことだった。なんでもアオコちゃんは夜六時以降は残れないからみんなの準備もそんなにしている時間はないという自分勝手なものだった。正直、アオコちゃんに限ってそんなことを言い出すとは誰も思っていなかったたのでその時は拍子抜けしてみんな仕方なしと軽い喫茶店をやることで一致した。

そのことを市ノ瀬に話すと「そう……。」と少し考え込んでしまった。

「たしかおまえのクラスは論文発表会とか言う意味の分らないことやってたよな。」と市ノ瀬が口を噤んでしまった隙に隣のコクハに言う「だったかな？覚えてないね。」と素っ気ない返答を返されただけだった。

「他に変わったことはありませんか？」

最後にコクハがもう一度訪ねると、市ノ瀬は首を横に振って「特には無いわねえ」と答えた。

「それよりあの子元気にしてるかしら。ほらあなた達の学校、あんな事件が起きたばかりでしょう？」

と心配そうに市ノ瀬が聞き返してきたのでコクハは「アオコ先生はあれぐらいで負けるような人じゃないですよ」と言って安心させた。

市ノ瀬との話はそれで終わった。図書室から出ると、響きのよいうるさい声に呼び止められた。

「ちよつとお、こんなところにいたのお？探したのよお・・・もう、置いてかれたかと思ったわ。」

トウコだった。相変わらず重そうな体をまるで大きなドラえもんようにちよこちよこ小走りでこっちに來た。

「置いてくつもりはなかったけど。すっかり、忘れてたわ。」

「まあ、失礼しちゃうわ。もう二度と忘れられないようにしてるから。」

つと言ってお腹をぐりぐり貌に押しつけられるとマジで焦った。

これが噂に名高い腹プレスというものか・・・。

「止めるバカ。窒息するでしょうっ！」

用事は済ました。わたし達は親子を装ったまま礼を告げてS女学院の門を去った。

帰り道は下り坂なのでトウコも悠々と付いてきて結構早く駅までたどり着いた。

途中でコクハがトウコにアオコちゃんのことについていくつかの質問を

した。

「アオコ先生って門限とか厳しかったの？」

「あら？よく知ってるわね。あの子、実家にいるときもそうだったけど、一人暮らしになってからも絶対に六時以降は遊ばなかったわよ。家にも入れてもらったこと無いわ。その時間以降は。」

「なんで？」

「知らないわよあ。ちょっと気になるけどねえ。いいじゃない。それがアオコなんだから。」

そういうもんだらうか？トウコの懐疑心のなさには近しいものを感じるが、わたしはこれほどではないと思った。

「ねえ、途中で何か食べに行かない？」

ほつとくといいつはすぐに食べ物求めて軒並みの飲食店へと視線を向ける。きつと彼女の頭の中には食べることがいつもついて回っているんだなあと思って、いろいろなことに少し納得した。

まあ、こいつとも今日でお別れだなと思うと、わたし達もまんざらではなく帰りはちよつと普段ではいけないような和食の高級そうなレストランにトウコのおごりを条件に入っただった。

元々、アオコちゃんはわたし達生徒に人気の先生で、あの向上心の固まりのような至成学院の中にあつては唯一と行っていいぐらいの生徒の味方だった。だから必然、わたし達生徒はアオコちゃんが好きだったしアオコちゃんに興味を持った。いろいろなアオコちゃん自身のことも聞いたし、アオコちゃんもほとんどのことは苦もなく話してくれた。昨日行ったS女子校も今日これから向かうK中学でもアオコちゃん自身の口からわたしが得た情報だった。まあ、大学での忘れていた一件でコクハにアオコちゃんについて色々思い出せとせがまれての結果だ。

学校が変わることに引越すような感じでアオコちゃんの家は中

学校、高校、大学、そして就職その度に住所が変わっていたけどこうやって足跡を追えているのはとにかくにもアオコちゃん自身がよく生徒達に自分のことを聞かれて話していたそのおかげだ。でもたしかにアオコちゃんは自分の経歴は惜しまず話したが、ただ一つ、アオコちゃんの通っていた中学校以前の記憶だけは何一つ話してもらったことはなかった。

十一月十七日、土曜日。

ちよつと前に起きた革命騒動のため、学校は土曜日は名ばかりの勉強休めとして休校だった。

朝八時、その日はマコトは昨日の夜から家に帰っていなかった。友達の家泊まるという内容がメールで受信されていたのでそれほどこっちは心配はしなかった。

逆に自由に動ける。わたし達は適當の昨日の残りのカレーを朝飯にしてからすぐに家を出た。

コクハは大きな音が嫌いだ。玄関を出るときにわたしが景気づけに思いっきり力を込めてドアを閉めるとその反響音に露骨に不機嫌な貌を浮かべた。

「おまえ、朝から張り切るのとはかまわないけど、少しうるさいよ。」

ボソツと蟻にでも話しかけるような小さなトーンの低い声で文句を言った。まあ、いつもの台詞である聞き流そう。

今日もまた秋晴れ。こう晴ればかり続くとわたしは一向にかまわないのだけど、傘は売れないので傘屋は困るのだろうなとたまに他人の心配をしてみるのも一興。ふと琴乃葉家の門前の通りへ出たところでもともに見知った形が道を歩いてくると目があつたのは驚き。相変わらずサバンナで見かけるようなズッシリとした重みのある足取り、きつと前世はサイやバッファローだったのだろう。その太い体をズスシと歩かせてこっちに近づいてくるのは、またしてもトウコだった。

いや、おそらくトウコだ。というのも貌はそのほとんどが面前につきだして広げた地図だろうか？紙のせいで見えない。でも、その体型だけでソレが誰なのかわたしには分かった。

「おまえ、こんなところでなにやってんだよ。」

わたしとコクハが目の前まで着てるのにトウコは気付いてなかった。両手で広げているのはやはり地図の本だった。しょうがないから言葉をかけるとトウコはブヒッと驚いて顔を見せた。

「あらあ、なにこの道であつてたのねえ、よかつたあ。」

なに？迎えに着てくれたの？って意味の分からない言葉を付け足した彼女は肩にぶら下げたデカイバッグに地図本をしまつと二カ二カとあいかわらず女のくせに豪快な笑顔を浮かべた。

「なんだ、おまえウチになんか用でもあつたのかよ？」

トウコは「へえ、結構大きな家ねえ」と琴乃葉家を眺めながら用つて、決まつてるじゃない。今日も行くんでしょ？」と平然と答えた。

なんという……。こいつまた付いてくる気なのだろうか？わたしは恐る恐る隣の妹の顔を横目にうかがうと、意外にもコクハは淡々と浮き沈みのない、いつもの表情をしていた。まったく何を考えているのやら。

「いいのかよ？」

わたしが訝しげにコクハを肘で突くと「いいんじゃないの。しょうがない。」というまた予想外な言葉が返ってきた。もうなんか投げ槍にでもなつたのだろうか？でもなんかちよつとコクハの気持ちも分かる。わたし達姉妹がこのトウコの強引さに逆らう気がしてこないのは、きっと彼女が少しキャラに似てるからだ。キャラもこんな風にめっちゃくちや強引というか厚かましいというか人なつつこいところがあつた。特にコクハはこの手の大人の女には弱いのだろ うなと思わないでもない。なぜならわたしよりもずっとコクハの方がマザコンなのだ。

再びトウコも加えてわたし達が向かったのは昨日とは正反対の方にある関東の端っこの県境の小さな町だった。

電車で数時間、午前中の十時頃になってわたし達はその町に着いた。昨日よりも距離的には遠い場所だったが、乗り換えが少なかったおかげで倍近く早く到着した。

小さな商店や瓦屋根の家があるいかにも田舎という風貌の茶色っぱい古くさい町。町の中心には一筋の小川が流れていて高架橋を渡ると東京ドームぐらいの地域に二個の古びた工場があった。昼なのに幽霊でも出そうな無人の工場で、廃棄されてからもこの場所に放つて置かれているようだった。

工場地帯を抜けると林が道の両側に広がる一本道があり、その先の開けた住宅街までわたし達はバスに乗って行った。トウコはバスの中でもなんか途中で買ったお菓子をむさぼっていた。いつも何か食って無くちゃ安心できないんだろうか、わたしは皮肉な笑みを浮かべてもはや突っ込む気もなかった。その緩やかな曲線を描いたお腹を触ってみたいという衝動を抑えるので精一杯だったのだ。

アオコちゃんが通っていたと言われるK中学校は静かな住宅街の近くの大通りでバスを降りて何軒かのコンビニやらスーパーやらを横切った先にポツンと佇んでいた。

低い塀で囲まれた白い三階建ての校舎と小さな校庭がある中学校で生徒数はコクハの予想を聞くと”三百人くらいじゃないか”とのことだった。

午前中に到着したため生徒達は授業中、学校は外見からすれば無人であるかのように静かなものだった。わたし達は昨日と同じくトウコを保護者代わりに学校に見学の振りをして入った。

木製のタイルを張った廊下にコンクリートの壁、一回の廊下を真っ直ぐ歩いていくとすぐに職員室へ着いた。

職員室では一人の男性教員が出迎えた。学校見学の理由を適当に言っと、学校案内を軽くされた。

「あの、この学校に十年ほど前に木村青子という生徒が通ってい

ませんでしたか？」

途中で期を見計らったようにコクハが男性教諭に問いかけた。

「はあ、木村青子さん・・・うーん、わたしは八年ほど前からここに勤務しているので十年も前のことはよく分かりませんねえ・・・」

男性教諭は言って「その人が何か？」と問い返した。

「いえ、ちよつとした。知り合いです。聞いてみただけです。」

コクハはそう切り返してまた口を噤んだ。わたし達は一年生の教室の授業を見学した後、体育館や音楽室などを見学してまた再び職員室へ戻った。その中学校はこれといって特色がないようでそれ以外に何か紹介するような場所はなかったようだ。おそらく図書室もあるだろうけど、きっと教室を改造した程度の小さいものしかないのだろう。いずれにせよ見せれるような場所はもう無いらしい。

職員室へ戻る途中、コクハは再び口を開いた。

「この学校の職員で長くつとめている人はいますか？」

「はあ・・・」

男性教諭は歩く足を止めて「いっぱい居ますよ。何か昔のことで聞きたいことがあるんでしたら、ちよつどいい人が居ます。」

職員室に着くと男性教諭は「少し待っててください。」と言うと職員室の中に入っていった。

「ねえ、昔のことなんて聞いてどうするの？」

トウコは耳打ちでわたしに話しかけた。どうやらコクハに最初にいちいち口出ししないと誓わせられてたのを気にして居るらしい。コクハに悟られないようにわたしにだけ訊いた。

わたしは別段困りもしなかった。とゆーか今の今まで何の疑問も言わずに高校やら中学やらとひつついてきたトウコに逆に疑問を抱いていたくらいだ。それでも本当のことを話す気はなかった。

「いや、ちよつとね。単なるアオコちゃん巡りだよ。」
と適当に返答して済ました。

職員室の隣の応接間のような一室で待たされてしばらくするとさ

つきの男性教諭が戻ってきた。後ろには一人の中年の教諭が立っていた。

「この方達が少し訊きたいことがあるそうです。」

言って男性教諭が中年教諭を室内に入れると自分はさっさと出て行ってしまった。

「えゝ、訊きたいことですか？何でしょう。」

中年教諭は白髪まじりの頭をぼりぼりと搔いて眼鏡の位置を直した。

「十年ほど前にこの学校に木村青子という生徒が通っていたと思うんですが、知ってますか？」

コクハは単刀直入に訪ねる。中年教諭は幾度か頷いてから「ああ、覚えてますよ。青子さんね、ええ、ええ、覚えてますとも。」と抑揚のない声で答えた。

「私はこの学校に勤めて二十年近くになりますが、だいたいのことはまだ覚えています。」

どこか惚けた感じの中年教諭だ。視線をキョロキョロと四方にちらばしたり首をコキコキと音を鳴らして左右に曲げたりする。わたしはマジでこいつ昔のことなんか覚えてんのかよ？と少し疑ったが、案の定次にその中年教諭はこういった。

「でもですねえ。木村さんでしたっけ？」

「はい。」

「あゝ、残念だなあ。ちょうど記憶にぼっかり穴が空いたみたい覚えてませんねえ。なんせ二十年もつとめていると数千人という子供達を見てきているものですから・・・。」

「でも木村青子っていう生徒が居たことは覚えているんでしょう？」

聞き返すコクハ。中年教諭は「ええ、ええ、もちろんですとも。」と大袈裟に大きく頷いて「あ、そうですねえ。ちょうどいい人が居ますよ。三年ほど前に退職されたんですが、たしか十年ぐらい前には現役バリバリで担任をやっていましたから。」

「その先生はこの学校の近くに住んでいます。この学校、一学年に二クラスしかないのでひよっとすると木村さんという生徒さんの担任だったかもしれません。住所を教えますから訪ねてみてはいかがでしょうか？」

言われてわたし達が次に向かったのは隠居したという神田という元教師の自宅だった。

「なんか、あの教師うさん臭い上にはつきりしないヤツだったなあ。信用していいのかな？」

わたし達は午後0時、太陽がてっぺんに登っている静かな瓦屋根の立ち並ぶ宅地を歩いていた。

「まあ、他に頼るものも無いだろう。」

コクハはあつさりわたし意見をさばくと、「よく歩くわねえ。疲れたわあ」とぶーたれるトウコを置いていくように足早に歩いた。いくつかの路地を曲がり聞いてきた住所へと向かう。トウコは「コクハちゃんってすごいわね。住所を聞いただけで何となく場所が分かるわけ？」と前を黙々とあるくコクハについてわたしに訊く。

「まあ、三件に一件くらいは家の前に住所と電話番号を記載してるからな。それで何となく検討をつけてるんだろう。」

答えるとトウコは「あたしなんて地図見ても迷っちゃうわ。」と感心した。

いくつかの路地を曲がつて細い一本道を進んでいくと、コクハは途中、一件の瓦屋根の和風の家の前で足を止めた。

「ここだな。」

どうやら到着したらしい。その家はけっこう大きい屋敷っぽい風貌だった。まあ、こちら辺の家では普通ぐらいだ。田舎で地価が安いからどの家もそれなりに坪数だけはあるのだ。玄関までは門から少し距離があり、門前の木製の柱には「神田」と表札が張られていた。

チャイムは無い。門前から声を張り上げて中の人を呼ぶのだろう

か。慣れない状況にしくはくしていると誰かがわたし達を呼び止めた。

「あの、ウチに何か用でしょうか？」

振り返ると和服を着た一人のお婆さんが立っていた。眼鏡をかけて髪を束ねていかにも老婦人といった風貌の整った女性だ。

「あなたは神田先生の奥様ですか？」

コクハが訪ねると、お婆さんにはこやかに笑って「ええ、そうです。主人のお客様ですか？まあ、こんなところでは何ですからお上がりくださいな。」と親切に答えた。

わたし達はお言葉に甘えて家の中にお邪魔した。

置物は基本です。玄関には狸の剥製がケースに入っておかれていて、廊下の途中には花が飾られた台が一個あった。純和風といった家の中に入り、廊下の途中の襖を開けると中は縁側の見える座敷の部屋になっていた。手前のちゃぶ台で一人の老人がわたし達を出迎えた。彼が神田先生だろう。

「あなた、お客様ですよ。」

わたし達が入っても老人は知らん顔で縁側の向こうの庭を眺めていたが、婦人が声のトーンを少し高くして呼ぶと、ぼけた貌で振り返った。

「ああ、もう飯か？」

「違いますよ、あなた。お客様ですよ。」

どうやら神田先生は少し痴呆らしい。小さい点のような目をクリクリとさせていくらか瞬きを繰り返してわたし達三人を眺めるとハテナと首をかしげた。

「すみませんなあ。最近記憶がどうにも……。えっとどこかでお会いになりましたかね？」

「いえ、わたし達はおじいさんと会ったことはありません。」

コクハは答える。老人は「なるほど、」と頷いて「会ったことがないのなら、そうですね。覚えておる訳がない。」と答えた。

妙に反応の遅いしゃべり方とぼけた表情を見ていてわたしは当て

にならない気がしてならなくなった。

「おい、この爺さん大丈夫なのかなあ？本当に三年前は現役で教師やってられたのかよ？」

コクハに耳打ちすると「分からん」と短い返事が返ってきた。

「まあ、そんなところに立っていてもなん

ですから、座ってください。すぐお茶をお持ちしますから。」

老婦人は言つて、部屋を去っていく。わたし達は勧められるままに座敷に腰を下ろした。

「まったく今年も紅葉が綺麗ですなあ。で、今日はいったい何のご用で？」

老人は縁側の向こうの紅葉を一瞥してから向き直つて言った。

「ええ、今日は先生が近くのK中学校で教員をされていたと聞いて訪ねてきました。少し、お尋ねしたことがあります。」

コクハが丁寧な話を切り出す。老人は「ほう、聞きたいこと？」と小さな瞳をパチクリとしばいた。

「十年ほど前、先生の生徒で木村青子という女子生徒はいませんでしたか？」

「木村……。」

老教師神田は少し、虚空を見つめてから、ふと思い出したように喋り始めた。

「ええ、居ましたよ。木村さんですねえ。あの子のことはよく覚えています。私が担任した生徒の中では特に記憶に残っている生徒でした。」

どうやら神田老人は本当にアオコちゃん先生だったらしい。昔を懐かしむような口調でしばし吐息をもらした。

「あの子は不思議な子でした。」

「不思議……というと？」

「ええ、私は木村さんが中学一年の頃から三年生の卒業するまで担任を受け持ったのですが、入学当初あの子は男子生徒の格好で登校してきました。分けを聞くとどうやら性同一性の生涯だとか、こ

両親はそう言っておられました。」

「性同一性障害？」

わたしもコクハもトウコモ一斉に顔を見合わせて小首をかしげた。当然だ。今のアオコちゃんを知っているわたし達からしてみれば何が何だか訳の分からない情報である。

「それはいつたい？」

コクハが聞き返すと神田老人は静かに頷いた。

「まあ、心は男の子で体は女の子ということですが、まあ、その頃の私は長い教師生活をしていればそういう子と出会うこともあるだろうと彼女の力になって上げるつもりでいっぱいでした。

ですが彼女が入学して半年ほどたった頃でしょうか・・・。」

「お茶をお持ちしました。」

良いところで水を差すように老婦人が襖を開けて中に入ってきた。片手に持ったお盆には四つの湯飲み茶碗と一つの急須が置かれていた。お盆を静かにちやぶ台に置き、急須からお茶を茶碗に注ぐとわたし達に一つずつ回された。

「それで？」

あらたまつてコクハが訪ねると、神田老人は出されたお茶を少しすする。老婦人はさっきまで主人が飲んでいた冷めた湯飲み茶碗を回収すると「ごゆるりと」と言葉を据えてそそくさと襖を閉めて去っていった。

「ええと、どこまで話しましたかな？」

神田老人が小首をかしげて聞いてきて、コクハは素速く「木村青子さんが入学して半年たった頃のところからです。」と答えた。

「おお、そうですそうです。」

そう、半年たった頃から彼女は学校へ来なくなりました。というのも当時、クラスの仲間達ももちろん学年中いえ、学校中が長ズボンをはいた女生徒を奇異な目で見ていたもので、あの子はきつとクラスに打ちとけられずに傷ついていたのでしょう。

あの時は私は私は心配しました。木村さんのお宅に伺って何度

も学校に登校してくれるように申しましたが、親御さん達ももはや学校には行かせられないと諦めておいででした。」

「……アオコちゃんが登校拒否？私は話を訊いていてもやはりにわかに信じられなかった。隣のトウコも怪訝そうに話に聞き入っている。もしかするとこの老人の言っている木村青子とはアオコちゃんとは名前が同じなだけの別人ではないだろうかと思つた。しかし、ここで老人の話は妙な展開を迎えた。

「それがなんと、彼女が登校拒否を始めてから二ヶ月ほどたった頃のことです。

私は朝のホームルームにやはりいつも通り空席となつた彼女の椅子を見てその日も憂鬱な気分になっていました。ですが出席を取り始めてすぐにクラスのドアを開く音が耳を打つたのです。

クラス全員がドアを見るとそこに立つてたのはまぎれもなく木村青子さんだつたんですね。しかもスカートをはいて女子の制服に袖を通して、とてもおしとやかな雰囲気の女の子に変わつていたのです。それから卒業するまで彼女はそれは女の子らしい女の子でした。

私はよく彼女の相談に乗っていて、彼女が紛れもなく男の子だったのを知っていましたから、それはそれは信じられなかったです。自分の目を疑いました。

正直、四十年以上も教師生活を送ってきましたが、あの時ほど不思議な生徒と出会つたことはありませんでしたねえ。」

「……………」

「いったい、この老人は作り話でもしてるんだろうか？だったとしたら入れ歯を根こそぎ引っこ抜いてやろうかとさえわたしは思つただつてそうでしょ？心は男で体は女。そこまではいい。それが原因で学校に来られなくなったのも分かる。けどどつた二ヶ月でその子は普通の女の子に戻つたと言ふんだから意味が分からない。

「いったい……これはどういふことなんだよ？」

神田老人の家を去つてすぐにわたしはコクハに詰め寄つた。はつきり言つてわたしじゃ皆目訳が分からない。本当にあの老人が言つてゐる木村青子はわたし達が思つてゐるアオコちゃんと同一人物なのだろうか？

「んゝ、少し複雑になつてきたな。」

コクハも意味分らない状態らしい。終始、眉間にシワを寄せて考え込んでいた。

「あたしも実はアオコには昔からちよつと疑問があつたの。」

帰り道、電車に揺られながら、トウコは小さくこぼすように呟いた。もう車窓の外は日が沈みつつあり茜色の西日が車両の中に差し込んできていた。

「外出は六時までだし、夜に家を訪ねても絶対に留守だつたの。アオコも夜は訪ねてこないで言うから、あたしも夜はダメなんだなあつてなんとなく納得してたけど……。」

でもある日、どうしても休養があつてあの子のマンションに夜訪ねに行つたことがあるの。その時はマンションの窓には部屋の灯りが付いていて、たぶん部屋にいるんだと思つてたのに、チャイムを押しても誰もでないの。まさか居留守を使われたとは思いたくなくてあたしはその日は留守だつたんだと思つて帰つたけど……。その頃から少しずつ疑問に感じる事があつたの。あの子は親友のあたしに何か隠し事をしてるんじゃないかって……。響子のこともあつたし心配だね……。でもその響子も去年死んじゃつて……。だから今回、あんた達が、アオコのこと調べてるつて本当はあたし気付いてたの……。だからあたしもついて行つて、少し知りたかと思つたの。

でもいいのよ、詳しいわけは話さないで……。でもこれからも調べるんでしょ？何か分かつたら教えてね？あたしだって仮にもあの子の親友だもん。色々心配だわ……。」

トウコはブツクサそう言うと、途中、最寄りの駅で降りて、改札口の手前で何度も何度も手を振つて消えていった。

「なあ、コクハ・・・これからどうする？」

結局、K中学校にいてもアオコちゃんのことは余計ちぐはぐになるようなことしか分からなかった。そして、ここで消息は遮断された。これ以前のアオコちゃんの足跡をたどる情報はもう無い。あとはアオコちゃんの実家にでも訪ねていくしかない感じである。

「あれだ・・・。」

わたしが怪訝に妹を見つめると、コクハは小さく口火を切った。

「明日はちよつと違う路線からも探ってみよう。性同一性障害とか・・・そんな簡単に治ったり治らなかったりするもんじゃない。」

「違う路線って？」

「ああ、ちよつどいいやつが知り合いにいるんだよ。」

「それってわたしも知ってる？」

「ああ、よく知ってるよ。母様の旧友だからね。」

/ 3

十一月十七日。クロトのマンション。

俺はその日もまたその場所でその夢を見ていた。夢の中なら思い出せる彼女との思い出を・・・。

/

朱く染まる街を、遠く窓の外に眺め、小さく吐息を吐いた彼女は
臃気。

わたしは何処？あなたは誰？わたしは誰？あなたは何処？

俺はその白く線の細い流麗な貌を隣で眺めて、その頬を伝う小さな雫からそんな叫びを感じた。

消音した動画の様な物語の中に俺と彼女はたしかに存在した。

夕暮れの西日がベージュのカーテンを赤く染めていつもの教室は
黄昏れた色の舞台。俺と彼女、二人の物語のメインステージ。

二つのコケシが教室に影を落とす。誰も知ることのないシーン。そこは誰もいない教室。俺達だけの放課後。戻れない記憶。夢でしか会えない神秘。

音楽が聞こえる……。

”タラリラット、タラリラ、タラリラリラ、タラリラ”

少しずつ近づいてくる。誰かが歌っている。

何か青いものが崩れる。崩壊して、いや、むしろ……それは壊れてる方が元々だったように自然だ。

「誰も分かってくれない……。」

キミって可哀想だね、蛇悪ちゃん。

俺はひとしきり、少女を哀れに思った。

目が覚めてやはりクロトの部屋。ソファの上で寝ていた俺に毛布が優しくかけられたいた。ふき出し窓の外、白いカーテンを透けて白い日差しがやんわりと差し込む。まだ夜ではないらしい。

何故こんな時間にここで寝ていたのだろうか？と考えるとすぐに昨日の記憶が蘇ってきてくれた。

しかし、ソファの前の机もその周りも綺麗にかたされていた。昨日の飲みかけのビールの缶一つ見当たらない。

クロトは？

俺は徐に腰を上げて静かな部屋を見渡した。クロトは居ない。そりゃそうか……まだ日も沈んでいないのだから。

一人納得する。静謐に静まりかえった部屋。自分の家でもないとなんな状況に一人で居るのはちと居心地が悪い。そしてどこか寂しい。もう少し、夜まで寝てしまおうか……。そんな風に思っているがらばうっと目の前の小さいテーブルと液晶テレビのほうを眺めていると、一つ興味をそそられるものを発見してしまった。

長方形の黒く平たい無駄のない形を絵に描いたようなソレ。携帯電話だった。クロトのものだ。

ふと、彼がよくそれを開いて憂鬱そうな顔を浮かべていたの思い出す。何を見ていたのだろうか？

見てみたい……。そう思った。盗み見だ。しかし、あんだけ露骨に目の前で憂鬱そうな顔をされてそう思わない方がおかしい。

何か悩みの種でもつかめれば少しは力になれるかもしれない……。

思考が肉体を知らず動かした。まるで見えない糸に引き寄せられるように手が目の前のテーブルの上の彼の私物へと触れる。少しの背徳感がチクチクとブレーキを踏もうとするが、俺の衝動をとどめるに至らなかった。

携帯電話をとり、そして開いた。

その時俺が、受信トレイを開かず、下書き保存を開いたのは俺の中の何かのモヤモヤがもうその正体をそっちの方向性だと感ずいていたからかもしれない。

しかし、この後、下書き保存。そのリストの中から一つのメッセージを見つけ出したときの俺の心境と来たらない。

いったいコレは何のいたずらだろう？自分で自分の見ている文章の内容を理解することができなかった。まったく意味不明だが心当たりのあるその文面。どう許容すればいいんだろう？

ふとカーテンで遮られたベランダ窓を眺める。その窓の外のレストランから下を見下ろすせばあの公園が見えるだろう。その公園で今年の春先、一人の女性が殺された事件が起きたのを思い出す。すると身震いもしないような凍り付いた思いに駆られた。

そんな刹那、ガチャッと鍵の開かれる音がした。玄関が開かれて誰かが帰ってきた足音が心臓をバクバクと高鳴らせた。

俺は息をのむ。振り返るとそこには木村青子先生が立っていた。

「あら、琴乃葉さん、まだいらしたんですか？」

心なしか疲れ切った様子でほんのりと柔らかな微笑を浮かべる彼

女。俺は素直に笑顔を返せる心境ではなかった。

少し酒臭いか……。でも、しょうがない。

その日、私は彼が寝るのが遅かったため友達との約束に遅刻してしまった。急いで家を出てきたため、財布は持ったけど携帯電話を忘れてしまったのに気付いたのは友人と電車に乗って目的の駅をおりたときのことだった。

ちよつとシヨックだ。私は自分で言うのも何だが少しそっかしい。いつも気をつけているのだけれどよく彼にケータイのメモで鍋の火を点けっぱなしだったとか忠告をくらうこともあった。

この日は勤務先の学校は訳あって休校。私は一昨日約束を取り付けられた友人と都心の方へ出かけて映画を見たり喫茶店によつたりして過ごした。

友人はミドリというショートカットのサバサバした子で、大学の頃もう一人のトウコという友人と私と三人組でいつも一緒にいた。今日の遊ぶ予定にはそのトウコも入っていたのだが土壇場で用事ができたらしくキャンセルをいれられた。

二人とは大学を卒業してからもうこうしてよく遊びに出かけることがある大切な友達だ。本当はこの日、私は前日の夜更かしで眠気も覚めきつていなかったけど、そんな大切な友達との約束を破るよりも眠気を我慢する方を優先した。

それでも映画を見ても喫茶店でお喋りをして洋服を買いに行っても眠気のせいで気分は朧気。帰ったらいの一番に彼にケータイのメモで長々と文句を綴ってやろうと決心していた。

途中、駅前のピアノ教室の看板を見て、悲しい思い出を思い出した。高校の頃、一緒に音大を目指した旧友の突然の死のことを・
・。

彼女はピアニストになるのが夢だった。私は子供の頃から自然とピアノを弾いていたので彼女と違って楽観的に音大を目指していたけど、彼女はいつも本気だった。いつも周囲をライバルと決めつけて目をぎらつかせていた頃の彼女はまるで今勤務している至成学院の生徒達のようなのだったのを覚えている。

そんな彼女のピアニスト生命を絶ってしまったのが私だった。

それしかない。自分にはソレしかないんだという固定観念に強くなりしがみついていた彼女のたつた一つの支えどころを無に消してしまった私は、それから彼女の望むことならなんであつても受け入れようと決めていた。

どんなことを言われてもどんな秘密を握られても私には反抗する権利はないと思っていた。もしも彼女の支えが私を憎み恨み陥れることに変わっていたとしても、それが彼女の生き甲斐として彼女自身の生きる力になると思えば、私はそれだけで逆に救われていた。そんな彼女が亡くなったのは今から約七ヶ月前の春先のことだった。

当初彼女に呼び出されていた私は住んでいるマンションのすぐ近くの公園に深夜訪れていた。しかしきつとその時には彼女はもうこの世には居なかったのだらう。

深夜の暗闇の公園の中、いくら待っても彼女が姿を現さなかったので私は諦めて帰った。それから携帯電話に何度も連絡を取っても返信は返ってこなかった。

代わりに彼女の亡骸が発見されたと報告されたのはそれから数日後のことだった。

そして妙なメモが携帯の下書きに残されるようになったのもそれから一ヶ月後の二件目の事件の時からだった。メモのやりとりで彼を問い詰めても自分は知らないという返事しか返ってこない。いったいわたし達以外に誰がどうやってあの携帯電話に下書き保存でメモを残せる人がいるのだろうか？

私には未だに分からない。今でも不気味でしうがなく、その事

件の報道や新聞の掲載を見ると胸の高鳴りが押さえられない。

実は少し心当たりがあった。ちょうどその妙なメモが残されるようになってから、彼には一人の友人ができた。その友人とは私も顔見知りだけど、その友人がいつも夜遅くまで彼と一緒にいると思うと、その携帯電話のメモを私と彼以外に操作できる人はその彼の友人ではないのかと、ふと不安になる。でも自分のクラスの生徒の保護者にそんな疑いを持つなんて私はなんて嫌な人間なんだろうという罪悪感が巡る。

だから考えないようにしよう……。そう思った。

その彼の友人は今朝、私が出かけるときもソファの上で寝ていた。さんざん散らかされたリビングを綺麗にかたずけてその友人の上に風邪を引かないように毛布を掛けて家を出たけど。あの調子では今日家に帰ってもその友人はまだ寝ているかもしれない。

本当は私と彼の関係を誰にも知られたくはない。こんな妙な体質を世間にばらしてしまったと思うとぞつとする。だから彼には友達を作ってもらいたくはなかった。でもできてしまったものはしょうがない。

それに彼の友達は私にとっても大切な人。人生でたった一人初めて来た彼の友達を無碍に扱うことなど私にはできないことだった。その日、私はあまりにも眠い体を酷使して大学の頃の友人と四時過ぎまで遊び歩いて、やつとの思いで帰路に発った。

見てしまった携帯電話はジープの後ろポケットにしまった。アオコ先生は俺の微妙な焦りの表情に気付いてかキョトンと疑問そうに小首をひねった。

彼女は帰ってきてから徐にリビングのソファやテーブルやテレビのあたりを探し回った。

俺は胸の高鳴る鼓動を押さえながら訊いた。

「なに、探してるんすか？」

「うん。」

訊かれると間延びした声でそううなって、アオコ先生は姿勢をおこして俺を振り向く。美しい黒髪と日焼けなんか知らないような陶磁器のような白い肌が眩しかった。

「携帯電話なんですけどお。おかしいなあ、朝ここに忘れたと思ったんだけど・・・。」

困り顔でそう言って少し怪訝そうな眼差しで俺を眺める。でもすぐに首を横に数回振ってまた探し始めた。

しばらくそうしてアオコ先生は携帯電話を探していた。でも見つかるはずはない。その電話は俺のジーンズのポケットの中で静かに電源を切られているのだから。

「今日もクロトに会っていくんですか？」

しばらくしてアオコ先生は諦めたように立ち上がって俺の横に座った。そんなに近づかれたらいろんな意味で緊張してしまう。アオコ先生は超がつくほどの美人だ。

「あ、はい。今日も少し話してもしたいと思って・・・。」

「そう・・・。」

言つとアオコ先生は少し素っ気なく答えた。やっぱりクロトと俺の関係を嫌がっているんだろうか・・・。

最初、俺がこの家に忘れ物を届けに来たとき、クロトと出会った。アオコ先生は俺たちの関係を知ると当初は似合わない不機嫌な貌で拒絶したものだ・・・。

「じゃあ、クロトに伝言頼まれてくれないかしら？携帯電話がなくて紙に書いてもいいけど、琴乃葉さんがいるなら別ね。」

アオコ先生は俺に気遣ってだろうか、再び笑顔に戻るとそう言った。俺はイエスと答えて引き受けた。

伝言の内容は、夜はもう少し早く寝ることお酒はほどほどに、というなんとも遠回しな皮肉を盛り込んだ言葉だったが俺が悪いのだ・・・もはや何の反論も浮かばない。

それからしばらく夜まではアオコ先生と俺は同じ部屋の同じ場所にいた。

「よくこうやってクロトと遊んでいくけど。セイカちゃん達の夕飯は大丈夫なんですか？」

少しの沈黙を断ち切るようにアオコ先生が訊いてきた。考えてみればこうやってこのマンションにくる事には慣れていたけどこの人とゆっくり話をするのが初めてだった。

「ええ、大丈夫ですよ。いつも家を出る前に夕飯の用意は済ませてありますし、今日は昨日の残りのカレーがほどよい案配に旨味を増してる頃です。」

アオコ先生は「ふうん」と何か言いたげに相づちをうつとまた俺たちは口を噤んだ。

「でも心配だわぁ。」

再び口火を切るアオコ先生。

「だって昨日も一昨日も二日続けて二人とも揃って欠席だったのよ。なんか家の事情だとか言ってたけど・・・心配だわ。」

・・・ちよつと待て、おい、なんだ？そんなときいてねえぞ。あの二人てつきり学校に行ってるものとばかり思ってたけど・・・今度はいつたいなに企んでやがるんだ？正直、初耳な事を訊いておれは焦った。仮にも保護者であるはずの俺が知らないところで姉妹は何をやっているのかまったく把握できていない・・・。

しかしこんな事実をアオコ先生に教えるわけにも行かず俺は、なんとか体裁を保った。

「あれです、たしか空木家のほうで何かあったみたいなんですよ。」

「そうなの。ならいいのだけど・・・。」

アオコ先生は心配冷め切らぬ様子でそう言って深いため息を吐いた。その表情は心から憂鬱そうなものだった。

そつえば彼女のクラスの生徒が一人あの事件に巻き込まれてしまったと訊く。そのことでは姉妹もずいぶん動揺を抑えられていな

い様子だったけど……やっぱり辛いのだろうな……。俺は勝手にそう解釈した。

窓の外の夕日が沈み出す。茜色の日差しがカーテンを透けてぼんやりと見えるようになった頃、そろそろクロトが戻って来る時刻を迎えていた。

その頃にはアオコ先生はまるで眠れる森のあれと比べても遜色の無いような美しい寝顔でソファにもたれかかって寝ていた。

うつすらと瞳を開く。目が覚めるとその人の肩により掛かっていた頭をおこした。

「マコト……。」

呼ぶと彼は気がついた。いつもの優しい眼差しで僕を見つめる。

僕は、彼を見て少し安心した。何故だかは分からない。最近一人でいると恐怖にも似た寂しさを感じてしまうことがある。

「目が覚めちゃったか？」

「うん。」

ゆっくり体を起こすともう一度僕はソファに座り直した。

「今日は眠いだろう？早めに帰るよ。」

「……なんで？」

マコトの突然の帰宅宣言に一瞬の拒絶を感じた。

「俺もさつき起きたばかりなんだ。帰る前におまえに会っておこうと思ってさ。」

マコトはどこか疲れた様子だった。早く帰ってゆっくりしたいのかもしれない……。

徐に立ち上がって玄関に向かおうとするマコト。

「……待つて。行かないで……。」

僕は思わず引き留めてしまった。

「一人になりたくないんだ……。」

我が儘かもしれない。僕のそんな言葉にマコトは微笑を作っても一度ソファに戻ってきてくれた。

「なんだ？どうしたんだよ。・・・ま、行くなと言われりや残ってもいいけど・・・。」

僕は心配そうなその言葉に少し背徳感を感じた。彼には家に妹たちがいる。だから本当はもっと早くいつも帰してあげなきゃいけないのに、僕はすっごく我が儘だ・・・。

マコトは何故か落ち込んでしまっている僕の横に腰掛けるとまた何も言わずに座っていてくれた。

僕は、最近すごく寂しがり屋になった。昔はそうでも無かった。ずっと一人だったし、それでいいんだと思ってた。僕と妹。二人は陰と陽のように存在してきた。彼女は人と接しそしてその傷みを知り、僕は人と関わらずその喜びを知らなくて良かった。ずっとそうやっていられるものだと思っていた。そのはずだった。でも・・・今は僕の方が壊れ始めていた。

昔はよく一人で料理を覚えたり裁縫を覚えたりゲームをしたり・・・とにかく一人で何か気を紛らわすものに挑戦していた。そうやって一人に慣れ親しんでいたはずだった。それなのにいつからだろう。彼が僕の目の前に現れた日から僕の生活はがらりと色を変えた。

いつもいつも、この部屋で彼の訪問を待ち続けた。彼と居ると楽しい。彼といろんな事を喋っているような遊びをして時には彼に美味しいごちそうをプレゼントする。こんなに楽しいことがあったと言うことを僕は長い間知らずに生きてきていた。

だから時々怖くなる。いつかマコトが居なくなってしまうたら、またあの生活に逆戻りしてしまうような不安が増幅して、僕の心を臆病にしていくな。

かっこわるい・・・。

そして

失いたくない・・・。

何故、急にこんな不安が押し寄せてくるのか訳が分からない。な

んだかとてもない何かが自分や彼を襲うような予感がしてならない。怖い。怖すぎて寂しすぎて、今が楽しすぎる。

昨日も時がたつのを忘れて彼と飲み明かした。彼が来るようになってから僕はお酒の飲み方も覚え、人との会話の方法も覚えた。彼が好きだ……。

手放したくない。大切な友達だ……。それなのに……。それなのに……。

アオコ……気付いているかい？キミはこういうことには鈍感だから気付いていないかもしれないね……。僕達はだんだん、薄れかかっているということに……。

これがどういう事なのか僕にも分からない。ひよつとすると僕だけが薄れかかっているのかもしれない。ついにアオコは一人になれるのかもしれない……。でもなんだろう？この不安は……。

いや、この不安は初めてのものじゃない。そう、もつと昔から、僕の記憶の根底にある……。そうきつとそれはずっとずっと昔……。

だって思い出せないんだ。そう、今になってよく考えてみれば僕達にあの頃以前の記憶は存在しないんじゃないだろうか？これは僕だけの気持ちなのかな？どうなんだろう、アオコ……。今、キミの意見が知りたい……。

十一月十八日、日曜日。

午前四時半。朝方、まだ太陽がその姿を地平の底に隠している時刻にわたし達は行動を開始していた。

これまで大学、高校、中学とアオコちゃんの過去に迫ってきたが、中学校まで調べた時点でそれ以前の過去への追跡は絶たれた。圧倒的にそこから先、情報がない。アオコちゃんの実家に訪ねていてもいいが、実はその実家も知らない。

朝飯に三日目のカレーを食べた。さすがのカレー好きのわたし達姉妹でも舌が飽きてきていた。マコトのヤツ、いつの間に帰ってきたのかわたし達が起きて茶の間に行くところで死んだように倒れて寝ていた。正直、最近こいつは手に負えない。まったくいつもいつも良く飽きずに同じ友達の家遊びに行くものだ。男だと訊いてるけど・・・ホモじゃないよなあと思ってしまう。

茶の間から見える窓の外はもちろん闇夜だった。つくづく夜つてのは静かなものだ。かすかに鳩のイビキのような鳴き声が、ホーホー、と聞こえた。アホっぽいイビキだなと思わず笑い出しそうになつてしまったが終始部屋を歩き来して淡々と準備を進める妹のせいでそんな気もすぐに失せてしまった。

コクハが用意した準備はリュックサック、懐中電灯、その他侵入グッズエトセトラである。

あれか？何をしに行くのかつて？・・・それはまあ、もちろんアオコちゃんの履歴書というヤツを拝見しに至成学院へと参ろうというのだよ。

わたしは妹のコクハの準備が終わるとさっそうと家を出た。未明の住宅街はやはり静謐で道路を歩く自分たちの足音がスニーカーを履いていてもすごく目立って聞こえた。

目的地の至成学院まではいつもの通学路を通りすぐに到着。途中コンビニなどは営業していてその灯りに少し救われたような気がした。正直、わたしは妹と違って夜とか暗いとかあんまり好きじゃないのだ。いや、むしろ嫌いか・・・。

「まだ二時間近くは明けないだろう。」

コクハは星も見えない夜空を見上げて楽勝とほほえみを浮かべた。目の前の外壁、至成学院を取り囲むその高い外壁の途切れた場所、そこに至成学院西門がそびえる。手前の警備員室には誰もいない。明かりも付いていなければ各所のランプも静まりかえっている。

鉄格子の長い門をよじ登りわたし達は中へと侵入した。学校なんてけっこう見かけよりも不用心なものだなと内心笑ってしまうくら

いここまで順調だった。

こんな事なら闇がわたし達を隠してくれなくても簡単に入れたんじゃないだろうか？

その調子でわたし達は本館の裏側のトイレの窓ガラスを割って校舎の中にも侵入を成功させた。どうもセキュリティが甘過ぎはしないだろうか？仮にもこの学校は有名私立中学校では無かったのだから？窓ガラスが割れば音に反応するサイレンが鳴るとか、門を誰かがまたげば監視カメラが捉えるとかあるでしょうに・・・。

「いや、以前の例の事件で校舎全体のセキュリティとか故障してしまったものとか含めて全て設備を交換している最中なんだよ」

疑問を投げかけるとコクハは当たり前のようにそう答えた。わたしは思わずため息を吐いた。あいかわらず色々把握していても人に喋らないこいつといると寸前まではらはらせられる。そう思ったのだ。

その後、もはやわたしはコクハに任せっきりでその後ろにトカゲのしっぽみたくついて回った。最初は職員室のドアを電気ドリルと電気のかぎりで鍵穴ごと切り取って中に入ると、いくつもの教室とかの鍵のぶら下げられた掲示板から第一資料室の鍵をチョイスしてとる。そして職員室を出て第一資料室を開ける。その中にはいくつもの資料が積み上げられたスチール製の支柱と鉄網だけで成り立った飾りっ気という物を知らないような棚がまたいくつも整列していた。

棚の部分部分にシールで資料の種類などが分別わかりやすく丁寧に明記されていた。

コクハはそこから職員履歴書というファイルの束を見つけ出した。そして調べる。アオコちゃんがこの学校に就職したのが今から三年ほど前だからその頃の履歴書ファイルを探して、すぐにわけなく木村青子という職員のデータに行き着いた。

中を開く、一枚のA4の紙切れにアオコちゃんの初々しい顔写真と指名、生年月日などがありその下に家族構成と経歴の欄があった。

他の教師の履歴書を見る限りではやはり経歴の欄に中学校より前の履歴を書いている人はほとんどいなかった。だからアオコちゃんもそうかもしれないと絶望的だとも思いつながら見てみると、なんと運の良いことに履歴書には大学、高校、中学の下に流河南小学校と明記されていた。

どうやらこれで次の目的地が決まった。

その資料を見つけ出して学校の外に出たときには夜は明け始めていた。白い空が東から迫ってくるのを見上げながらわたし達は次に駅前の方にある雑貨ビルの三階にあるネットカフェへと向かった。

ネットカフェ『ガリラヤ』。その看板が雑貨ビルの階ごとのロゴの中に3Fと付記され表記されている。わたし達は夜明けのビルに入っていた。エレベーターで3Fに上がりガリラヤの中に入る。中は受付カウンターこそ白い明かりにつつまれていたが、いざ喫茶フロアに入ると明度は薄暗いオレンジ色のムードのあるものに変わった。

いくつものブースや個室の壁側に漫画や雑誌の棚があり、わたし達は受付で選んだ奥の方のペアブース席へ向かった。

わたしは途中で見たかった某剣豪漫画をさりげなく取っておいた。ブースの中に入ってコクハがインターネットで流河南小学校という小学校を調べている間、ずっとその漫画を読みふけていた。

しばらくしてちょうどわたしはコミックを半分ほど読み終わった頃、突然目の前の両手に持つコミックを奪われた。

「おい、終わりだ。いくぞ。」

コクハはいつの間にかPCの電源を切っていた。

「なんだよお。いいとこなのにな？もう終わったの？」

これから話が佳境に差し掛かるのではないかという素晴らしい引きのある漫画の最中で突然遮断される苦しみと来たらない。わたしはぶーたれてみたが、コクハは目元をピクピク細かく痙攣させながら鋭い眼差しでわたしを睨んだ。

「おまえなあ。調子のとつてると頭突くよ、まぢで。」

目的を見失うなとクドクド説教をたれながらわたしは渋々漫画を棚へ戻した。

「で、流河南小学校ってどこさ？」

ネット喫茶をでながら訪ねるとコクハはほのかに微笑を称えた。

「偶然か必然か・・・この金城の目と鼻の先だよ。」

「え？」

予想だにしない情報、わたしは思わず足を止めて振り返った。

「まぢで？アオコちゃんの地元ってここだったのかよ？」

「うん」

コクハはにも関わらず冷静な貌で頷いた。さすがミスターポーカイフェイス。無感覚者。よ、血も涙も無い冷徹女。あ、ミスターじゃないミスか、いや、最近では既婚者非婚者差別をなくすためにミズっていうんだっけか？ま、いいや。

「それでもつと興味深いことがあるんだよ。」

エレベーターの中でコクハはそんな思わせぶりな台詞をらしくもないことに吐いた。

「なんだよ？」

「実は流河南小学校、通称ルカ小はアオコ先生だけの母校ではないらしい。」

「・・・そりゃあ、おまえ当たり前でしょう。アオコちゃん以外にもたくさん卒業してるでしょうよ。」

「違うよ、違う。そうじゃない、私達の知り合いの中でアオコ先生以外にもルカ小に通ってた人間が居るっていつてるんだよ。」

ああ・・・なるほど・・・

「って、マジ?!」

「大マジだ。いつから私はそんなくだらない冗談を言うような人間になったんだおまえの中で？」

まあ、そりゃそうだ。

「とゆうことはだ。ソレ一体だれさ？」

「うん、一人じゃないよ。」

「一人じゃない・・・。」

「灯台もと暗しとはこのことだなまさに。イリヤとアサギ、あの二人も流河南小学校卒業だよ。直接聞いたことがある私の記憶が間違つてなければね。」

コクハの記憶力を疑うなんて事はまず不可能。こいつは一度覚えたことは自閉症のサヴァン症候群の共感覚並に覚えてるんだぜ。まあ、少しそれは大袈裟かもしれないけど・・・。

とにかくだからして、ということはなんという・・・。あの二人がアオコちゃんと同じ小学校だったとは・・・。

「んでも、ソレが分かつて何かいいことでもあるのか？同じ小学校だからってアオコちゃんとヤツらとじゃ卒業した時期に差がありすぎてなんの参考にもならないでしょう？」

「それになるんだなあ。」

「・・・？」

またもや似合わない思わせぶりな態度。気持ち悪い。こいつは漫画みたいに引いたり押ししたりみたいなことは領分じゃないでしょうに・・・。

「実はさ。私の記憶が正しければアサギの兄貴。あいつも流河南小学校卒業なんだよ。」

「ええ？まじかよ。」

「くだらない嘘などつかん。二度言わせるな。しかもアサギの兄貴はアオコ先生と同じ学年だからね年齢が・・・。」

なんという・・・偶然。何か都合良すぎる気もするけど・・・だとすると、もしも灰原灰と木村青子が同じ学校の同学年だったなら・・・これは実に、おもしろい。

「で、おまえら話つてなんだよ。眠いなあ・・・。」

目ざりをこすりながらアサギは不平そうに言った。窓の外には駅前通があり、まだ人通りは少ない。日曜日のしかも午前七時半にわたしとコクハは灰原家に赴き、目の前の二人の兄妹をこの喫茶店へと連れてくるに至った。

金城駅駅前のカフェテリア「ゴルゴダ」。内装は長いカウンターと各席フロア一体型の普通の喫茶店で壁側に出窓があり花瓶などが飾られている。日曜でも朝早くから開店している珍しい喫茶店である。夜は飲食店としても稼働しているそうだ。

わたし達は窓際の四人席に座っていた。

「別におまえは呼んでないんだよ。」

コクハはアサギの眠そうな顔を見ない風に目を優しく閉じて落ち着いた雰囲気を出されてきたコーヒーをすすった。言われたアサギはムツと眉間にしわを寄せる。

「てか、なんでカイ兄に用があんだよおまえ達が？」

身を乗り出したアサギはバンッと力強くテーブルに両手をついた。その音が朝方のティータイムに来た数人の客達を振り返らすにいたって、アサギの兄貴が恥ずかしそうに口火を切った。

「もういいから、静かにしなよ。アサギ。」

言われてアサギは腑に落ちない感じでふてぶてしく椅子に座り直した。

喫茶店の中は暖房が効いていて暖かい。初秋の寒波が迫りつつある外からこの中に入ると不思議と顔がほてった。

「ちよつとね。カイさんに訊きたいことがあるんですよ。」

刑事ドラマの刑事の捜査風に見えなくもない台詞。コクハはなんの前振りも入れずそのまま話を切り出した。カイはまじめな男だ。どうぞと頷いて話を促した。

「実は・・・カイさんの卒業したルカ小に同学年で木村青子さんって方がいらしたと思うんですが、覚えてますか？」

「きむら・・・あおこ・・・」

訊かれるとカイは静かにそう繰り返して、つと唇に指を据えると

少し怪訝そうに

「それってあの木村青子でいいのかな？」
と聞き返してきた。

「心当たりがあるんですね？」

逆に問い返すコクハ。カイは小さく頷いた。

「ちよつと！ちよつと待った！」

その時、アサギが慌てて口を挟んだ。

「もしかしてその、木村青子ってアオコ先生のことかよ？」

やっぱりこいつ連れてこない方が良かったよなあ絶対……。わたしは露骨に面倒くさい顔でアサギを眺めて

「まあ、いいからさ。訳は今度ゆっくり話すよ。少し黙っててくれ。」

と言った。アサギはまたもや腑に落ちない顔で渋々とふくれっ面を座らした。

「なに、木村青子は今アサギの通う至成学院で教師をやってるのか？」

すると突然カイは少し驚いたように妹に訊いた。アサギはコクリと頷いてもまだつまらなさそうに頬を膨らませていた。

「まあ、いいですから。訳は後で話しますからとりあえずその木村青子さんが小学校の頃のことを知っている限り伺えないでしょうか？」

コクハはだるそうな顔を一瞬よぎらせた後、話を進めるためにそう言った。カイはふむつと少し分らないような顔をした後、ちいさく頷いた。

「まず、一番わたし達が興味深かったのは、マコトです。」
コクハはついに本題を問いかけた。

「あいつはたしか小中とカイさんと同じ学校に通っていたはずですよね？」

「うん、そうだよ。それが？」

カイは疑問そうな顔を浮かべた。そりゃそうだ、木村青子の話を

していて突然マコトのことに移ったんだからね。

「おかしいんですよ。」

コクハはここで眠そうな淡々とした目線でカイを直視した。

「あなたはアオコ先生を覚えている。なのにあいつは最初隣の姉のセイカのせいで学校に呼び出しをくらったとき、初めてアオコ先生と会ったという印象だった。それからマコトにアオコ先生とは小学校が同じだったのだという話しは一切聞いたことがないんですよ、私達は。」

「・・・それは、おかしいね。」

カイは低く声を落とした。そしてまた首を横に振った。

「いや、違うんだ。もしもあの木村青子がただの学年の中の一人の生徒に過ぎなかったなら確かにあのマコトなら覚えていなくてもおかしくはない。でも・・・」

「・・・でも？」

「僕は確かに覚えてる。マコトはあの木村青子と一時期すごく仲が良かったはずだよ。そりゃあ、僕だって焼き餅を妬くくらい、二人は一緒にいたと思うよ。」

どうやらビンゴらしい。コクハは少し笑みを浮かべると

「・・・もつと詳しく聞かせてください。」

と話を促した。カイは頷いて語り始める。

「あの二人、よく昼休みに学校の屋上でお喋りしていたのを僕は実は知ってるんだ。よくこつそりマコトの姿を探しに行くといつも木村青子と一緒にいたからね。」

「・・・」

そんなに仲が良かったのに何でだろう？マコトはアオコちゃんと会ったとき、確かに初対面という感じだったけど・・・わたしはやはりその部分が不思議でしょうがない。

「ちよつと例のぶつ出してみ。」

その時、コクハがそう言った。アサギは言われて

「お、おう。」

と答えて持ってきたカバンの中から一冊の本を取り題した。四角い大学ノート二冊分ぐらいの大きさの本。それは小学校のアルバムだった。

「あ、いつのまに持ち出してたんだ？おまえ。」

カイが慌てた顔つきで言った。それはさつき灰原家に訪ねた際にコクハがアサギに指示してカイの部屋から持ち出させていた彼の小学校の頃の卒業アルバムである。

アサギの手からコクハに渡され、そのアルバムはページをめくられていく。わたし達はさながら群がるハエのごとく顔を近づけてアルバムを見た。

しかし、どうだ？ページをめくって灰原灰や琴乃葉真琴のクラスだった6ー3のところに来て、生徒の顔写真の中に木村青子という名の少女は存在しない。

「あれ？いない……。」

小さくわたしが呟いた。するとカイが分かったたかのような顔で「木村青子？……彼女ならどんなに探してもいないよ。」

と今更のように告げた。

「何故？」

コクハが決断早くアルバムを素速く閉じてしまつとそれをアサギに返しながら訊いた。

「うん。彼女、六年生の一学期いっぱい転校しちゃったんだ。

しかも妙な噂を残して……。」

「うわさ？」

「うん、あの子、ちょっと変だったんだよ。図工の時間に先生の使う電気ノコギリにいたずらをして一回電源を入れるとストップを効かなくしたり。理科の授業で妙な薬品を作つてそれを花にかけて枯れさしたり。けっこう悪名高かったんだ。」

「まぢかよ……。」

アサギが少し顔を引きつらせて言った。ま、確かに少しどころかまるでデビルだなそれは……。カイは続ける。

「だからかな。彼女が転校してから噂が立つたんだ。実は彼女はある生徒を殺して、警察につかまって刑務所に入れられたんだって。でも大人達は子供には本当のことを話さないんだってね。」

「そのある生徒って？」

「うーん、わからない。単なる噂だし実際、彼女が転校する際に死んだり、突然になくなった生徒なんて一人もないもん。」

「なあんだ。嘘じゃん。」

アサギはネタはあがったという風に白けた声を上げた。

「うん、たぶんね。」

カイはその妹に横目で答える。

「それにしてもソレって本当にあのアオコ先生なのかよ？信じられねえなあ。」

そう不平をいうアサギにわたしは同感と答えた。右に同じだ。今もわたしはこの木村青子がアオコちゃんと同人物だとは信じていない。それを解き明かすことがこれからの課題だと思っているくらいだ……。

「これは……いよいよ分かりにくくなってきたな。コクハ。」

アサギとカイと喫茶店を出るとわたし達はいよいよこんあことをしている理由を尋ねてくる二人に適当な言葉を取り繕って別れた。道の途中でこんがらがってきたこの捜査の行方を心配すると、妹からの返事が返ってこない。

隣を見るとなにやらぼーっと自分の歩く足のほうを向きながらひたすら何か考えている風だった。

「コクハ？」

もう一度大きめの声で呼ぶとコクハは気がついたように視線を現実に戻した。

「ん？なんだ……。」

「なんだじゃないよ。これからどうすんだよ。余計意味深なことになってきちゃったよう。」

「まあおちつけセイカ。逆にやっぱりあの人に頼るのが正解だとはつきりしたようなもんだろ。路線は変わってないよ。逆にますますはつきりした。」

「・・・あの人って例の？」

「と、いうことだ。」

どうやらわたし達はこれから病気でもないのに電車に乗って病院に行かなければいけないらしい。そこはノ工医科大学付属ソエル記念病院というなんとも長ったらしい名前の東京の郊外に位置する複合病院だったはずである。

十一月十八日日曜日

目が覚めると世界が横転していた。いや、違う。俺が座敷の上でうつぶせに寝ていただけであるとすぐに気がつく。頬に座敷の床面が当たっていて少々ひりひりした。このまま洗面所に鏡を見にいけばきっと顔の側面だけギザギザした跡付きの赤くなった状態を拝めることだろう。

体制をおこす。ベランダの窓のほうを眺めると秋空の微弱な日差しが部屋に入り込んでいた。電灯はついていない。次に時計を見ると午後0時半。茶の間は昼の外光だけで明度を保っていた。

省エネじゃないか。電気の糸を引こうとした手を止めてそのまま、襖を開けてダイニングキッチンへと向かった。なあに、昼飯なのか朝飯なのか分からんけど、カレーでもすくって食べようと思ったのだ。炊飯器からご飯を皿に盛る。

しかし、キッチンのコンロの上に置かれた鍋を見て啞然。残念ながらカレーは全てやつらによって処分されてしまったらしい。

空っぽの鍋を見てがっかり。どうしてくれる、この片手にかざされた皿の上に盛られた白いお米の行方をどうしてくれる？そしてふと気がついた。

誰もいない・・・。

どうやら姉妹はまた出かけていていないらしい。日曜の昼ならいつもこの時間は友達を招いてダラダラと目的もなく茶の間でだべっているヤツらだが、今週はめつきり姉妹とは会話をしていない。

まあ、たまには静かで落ち着くか・・・。

ガランドウの家の中を意味もなく歩き回る。妙に寂しい感じがした。トコトコ歩き回っていてたどり着いたのは元の茶の間。俺は意味もなくそこに座るとやるのが無くまた意味もなく頂垂れていた。少し、考えたくないけど考えてしまうことがあった。

携帯電話。

ちやぶ台にうつぶせに頂垂れながら顔の隣にあるその一つの携帯電話を眺めた。

俺のじゃない・・・。

持って帰ってきてしまった。それは友人の携帯電話。その中身には見てはいけない内容の下書き保存があった。思い出してもなんのいたずらなのか気持ちが悪い。

いたずら？

ふと脳裏に疑問がよぎって、消えた。どうしてもそれが単なる悪ふざけに思えない自分があることを知っていた。それは嫌な予感。何かが繋がりそうな、それは繋がってはいけない何か。イメージにすれば絶壁の途中、ロープに繋がれた身体。落ちれば一直線にある世逝きな下界の風景。なのに・・・ちぎれてしまいそうなロープ。繊維の一本一本が形作るロープのその繊維の一本一本がプチンプチンと不吉な音を鳴らして切れていく様。

嫌な予感がする・・・。

俺は、気を取り直すために家を出た。満喫で漫画でも読んだり映画でも見に行ったりしてみようかと思った。

とにかく忘れたい・・・。考えないようにしよう・・・。心の中でそう呪文のように唱えた。

来るとき、それでもなぜか俺は例の携帯電話を持ってきてしまった。自分のもあわせて二つの携帯電話を俺は今所持していることになる。

金城の駅へ向かう途中も、憂鬱な気持ちは晴れなかった。秋空はまた晴れ。結局今週はずっと天気もぐずつくことはなく晴天だった。天気予報など当てにはならない。週末は曇りのち雨などと・・・よく平然と嘘をつくものだ。

途中で心臓が止まるかと思うような着信音が耳をうって俺は思わず背筋を限界ギリギリまで緊張させた。

でも、違った。

鳴ったのは俺の携帯のバイブと着信音だ。片手でポケットから携帯電話を取り出すともう一つの手でもう一方の携帯電話の所在を確かめた。大丈夫・・・電源を切つてあるのだ。鳴るわけがない。

メールは珍しく親父からだった。久しぶりの一言もなく切り出された一文は妙な内容で少し歩く足を止めた。

”明日、青果ちゃんと黒葉ちゃんのお母様がそっちに姉妹を迎えに行くんでよろしく。”

・・・俺は少々、面食らった。あいかわらず唐突じゃないか・・・。来るときも去るときもまったく心の準備というものを配慮してくれないものだ・・・。

本当なら、もっと大騒ぎをする内容だった。そりゃあ、俺だって最初は姉妹と暮らすのを面倒にも思ったが、暮らしているうちに少しずつ愛着ぐらいわく。突然のお別れ宣言。それも心のないメールからの宣告。たったそれだけの一文、それでも少しは落ち込むタネにもなっただろうに・・・。

その時の俺にはその程度の問題では気を散らせるほどの元気はなかった。

そうか・・・母親は生きてたのか・・・。それだけ思った。とゆーかまあ、生きてたのなら今まで何をしてたのかを問うのは今は愚問だ。あれだ、もしかすると血が繋がっているのだから俺も一緒に

連れてかれるのだろうか？いや、そんなのはお断りだ……。

もう二度と、母親なんていらぬ。失うのは一人で十分である。姉妹の母親なのだからきつと美人でもすげえ変人に違いないな……とそう思った刹那だった。

誰かが俺を呼び止めて俺は振り返った。

「マコト君？キミは琴乃葉真琴君だよ。やっぱり？」

振り返った正面にいたのはどこかで見覚えのある顔の男だった。そう、すぐに記憶は蘇ってきた……。

「あなたは……たしかあの時の、阿乃先生？」

男はあいかわらず眼鏡をかけたいかにも害のない童顔な顔をしていた。

「ええ、お久しぶり。そして君に会うのはこれで三回目だ。」

「？」

三回目。俺は自分の頭の中に三つの指を浮かべ考えた。たしか、この人にあつたのは緑川邸での一件の一回と今日ここでの一回。計二回じゃないか。折れない指が一本残る。

「えつと……」

俺が意味深に聞き直そうとすると阿乃連枝はにわかに微笑んで首を横に振った。

「そんな簡単には思い出せませんね。そうだ、これから少しお時間をいただけますか？」

突然のお誘い……。俺は何が何だか分からずじまいのまま、彼についていくことになった。

「いや、よかったですよ。やっぱりキミはあの真琴君だったんですよねえ。」

連れて行かれたのは阿乃連枝のマンションの一室。セキュリティの整った高級そうな褐色の外壁の世田谷の一区画にあるマンション

ンだった。俺の家からはギリギリ徒歩でもいける距離だった。

そして、俺は完全に思い出した。この人はたしか、精神科医だか何かの医者だ。脳外科もやってるんだっけか？そしてあの緑川邸の事件の時は被害者の少女のかかりつけの医師で現場に居合わせたんだ。

そこまで思い出すとさらに分からなくなった。たしかにこの人と俺が会うのはその時と今日とで二回目ははずだ。なのに彼は三回目だと言った。

「あの、さつき三回目って言いましたけど、俺と阿乃先生って他にいつお会いしましたっけ？」

綺麗に整理整頓された清潔感のある高級ホテルのような広々とした部屋。大きなベージュのソファと大画面の液晶テレビ、オーディオ機器、ベランダの窓からは東京の見晴らしが一望できた。

阿乃連枝はそのベランダの方を眺めながらとりあえず程度に俺にソファへ座るのを勧めながら答えた。

「ああ、思い出せないようになってるんですよ。もう、気にしないで。後で分かります。」

チンプンカンプンな答えである。俺は小首をかしげながらソファに腰を下ろした。その後、阿乃連枝も向かいに座った。

阿乃連枝の座った後ろの空間には子供用の大きな色とりどりの積み木のようなものやおもちゃの類が置かれていた。よもやこの人はそういった幼い趣味があるのだろうか童顔なだけに……。

「あれは？」

それを指さすと阿乃連枝は微笑を浮かべて答えた。

「ええ、このマンションによく僕の患者さんも招くんです。子供達も多いですからね。」

なるほど……仕事道具だったか。俺は納得、しかしどうしてだろうこの部屋は落ち着く。何かいい香りがして眠気を誘うようだ。俺は背もたれに知らずもたれかかっていた。

いくつかの話をした。最近のこと。仕事のこと。俺のことを訊か

れたら次に阿乃先生のことを訊く。そんな繰り返し、何故だろう？俺は別段なんの拒絶感もなくその会話を楽しんだ。途中でクロトのことを話した。人に話すわけにはいかないようなところまで詳しく話してしまったのは後悔と言うより不思議だ。彼の本名まで知っている限りまるで阿乃連枝に引き出されているように言葉が止まらなかったのだ。二重人格の人間の話。それを精神科医に話すのはある意味普通のことだったのかもしれないが・・・。

「どうです、そろそろ最近何かほどこけていくような気がしませんか？」

妙なことを質問された。

「・・・ああ、少し・・・いや、なんでもありません。」

俺はあの携帯電話のことを考えた。ほどこけていく・・・そう確かにそれはそんなような嫌な予感だった。

「いいんですよ。ここでは心を自由にして、ほら絶対誰にも話さないから言つてごらん。」

阿乃連枝の声はいつの間にか子守歌のように優しいものに変わっていた。いや、元から彼の声は穏やかで人を安心させる。そしてこの部屋に来て、俺はその感を強めていた。とても居心地のいい言葉と空間。俺の心のどこかが勝手に口をゆるめはじめていた・・・。

「実は・・・」

徐に切り出していた。阿乃連枝は鈍く光る眼鏡のレンズの裏できっと真剣な眼差しになっていたことだろう。

「この携帯電話なんですけど・・・。」

俺は自分が意識的なのかどうかあやふやなうちに電源を切られた俺のじゃない携帯電話を阿乃連枝に差し出した。

阿乃連枝は黙って受け取る。

「それ、さっき話した友達のなんですけど・・・。下書き保存に妙な文が保存されているんです・・・。」

「ちよつと見ても良いかな？」

阿乃連枝は徐に電源をつけると携帯電話を操作し始めた。そして

その一文に差し掛かったのだろうか・・・初めて表情に変化を来した。眉間にしわを寄せて眼鏡の位置を中指で直すと・・・読み上げ始めた。

「十一月十一日十七時十八分。藤本利香死亡。廃棄場所、金城町アパート「ビリーヴ」ゴミ置き場。」

俺は言葉も浮かばない。嫌な気持ちでもなかった。むしろその文を読み上げた後の阿乃連枝の反応に注目していたように思う。

「これは・・・この間のゴミ箱死体遺棄事件のもですね。携帯電話の下書きに保存されるとき時刻の表示が正しければまだ新聞もマスコミも警察さえも少女の死を確認していないときに作られた文と言うことになる・・・。」

阿乃連枝はそう言った後、口を閉じて深いため息を落とした。

「どうやら私が先生の遺言を果たす前に彼女の封印は解けてしまつたらしい・・・。」

・・・。

もうその時には俺の心は靄がかかったようにはつきりしないものになっていた。阿乃連枝の声が遠く漣の向こうから聞こえてくるように小さくなったり大きくなったりはつきりしない。意識がもうろうとして最後に聞き取れた言葉は・・・

「いいでしょう。私も私の仕事をしなければいけないようだ。思い出させてあげましょう。それが私の朝倉先生から言いつけられた最後の役目なのですから。それにあなたの記憶を塞いだのは朝倉先生ではなく、この私なのですから・・・。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6244i/>

B&B 第五章

2011年1月27日11時19分発行